

18-61
893

岩垂憲德著

古詩新釋

完

東京建文館藏版

古詩新釋はしがき

詩は有聲の畫なり、畫は無聲の詩なり、故に詩には聲と形となかるべからず。形を先にして論ずるものは、銀笛を弄するも、其妙を傳ふること難く、聲を先にせば、竹石を鳴らすも、猶よく潛蛟を舞はしむるものあらむ。是れ詩の巧拙ある所以にして、かの字句の彫琢に役せらるゝが如きは、到底天籟を傳ふること能はざるべし。天籟とは何ぞ、自然の聲なり。

茲に古詩を採りて、之が新釋を試むるも、亦古人の天籟に接し、性靈の微妙を味はむと欲するに外ならず。然りと雖も性靈と感情との接觸は、其人によりて相同じからず。或は彼を揚げて此を抑へ、或は此を貶して彼を褒む。然れどもかの風雅頌、賦比興各聲ありて、其形を異にせるが如く、廬山の三幅三異、卒に複筆なきが如く、褒貶を其間に置くは、恐らくは淺者の見たる

を免れざるなり。されば明の謝茂秦は、揚用修の宋人詩史の説を反駁して
 いへらく、『用修、少陵を譏りて、詩に淫亂を刺れば、則ち雛雛鴻雁、旭日始旦
 といひ、必しも慎莫近前丞相嗔といはず。流民を憫めば、則ち鴻雁于飛、哀
 鳴嗷々といひ、必しも千家今有百家存といはざるなりといへど、彼用修は
 嚮に稱する所、皆興比なるを知らざるのみ。詩固より賦あり、情を述べ事に
 切なるを以て快となし、盡くは含蓄を要せざるなり。詩に荒を語りて、周餘
 黎民、靡有孑遺』といひ、儀を失ふを譏りて、人而無禮胡不遄死』といふ。若
 し少陵の口より出でしめば、知らず用修何如に貶剝するか云々と。見るべ
 し、趣異なれば體亦同じからざるを。六義各其特色を直寫して、區々人工を
 加へざるは、天籟を發揮する所以にあらずや。
 或は言はん、もし天籟を以て詩の本色とすれば、眼前の景、口頭の語の、比興
 を一時に取れる近體絶句こそ却りて天真を得るものなれ。古風長篇の如き

は、所謂有韻の文にして、意を用ひて情を描き、感を述べて事を寫するもの
 なれば、所詮彫琢の痕を脱すること能はずと。是れ所謂其皮を相して、其肉
 を知らざるものの言のみ。夫れ詩の醇なるものは、之を酒に譬ふことを得
 べし。世の翹生を好まざるものは、酒中の趣を解せずと雖も、綠酒青樽、陶然
 として酔へるものは、酒氣蓬勃、餘醺常に醒めずして、醇味の脈々として絶
 えざるを覺ゆべし。詩興亦斯の如し、而して其所謂醇なるものは、真情の發
 露に外ならず。詩にして真情の發露なくば、酒に芳烈の氣を少くが如く、時
 に或は眼花耳熱、人をして春色に酔はしむるものあるも、遂に神を感想の域
 に逍遙せしむること能はざるべし。是を以て余は此新釋に於て、抒情詩敘事
 詩の長篇を採擇せり。蓋し此種のもものは、多く真情を吐露して、斧鑿の痕な
 く、かの彫句繪章、聲律に拘はり、平仄に束せらるゝ近體詩の及ぶべきにあ
 らざればなり。

要するに天籟性靈は詩の體なり、述情と切事とは詩の用なり。體用相待ちて人を感化し、諷刺すれば思ひ邪なく、微諫すれば其言入り易し。詩の人生に於ける功も亦大なるかな。而して余は更に一步を進めて言はんとす。既に天籟に原き、性靈に發するものを以て眞詩とせば、かの近時詩論家の囂々として徒に理を以て詩を解き、情を外にして詩を談するものの如きは、共に詩を言ふに足らずして此新釋の倣ふを欲せざる所なりと。

明治四十一年夏月

巢鴨蒼松書院に於て

著者しるす

古詩新釋

目次

一、回文錦字詩	晉	蘇若蘭
二、長恨歌	唐	白樂天
三、琵琶行	同	白居易
四、麗人行	同	杜子美
五、續麗人行	宋	蘇子瞻
六、明妃曲	同	王介甫
七、明妃曲 其二	同	蘇子瞻

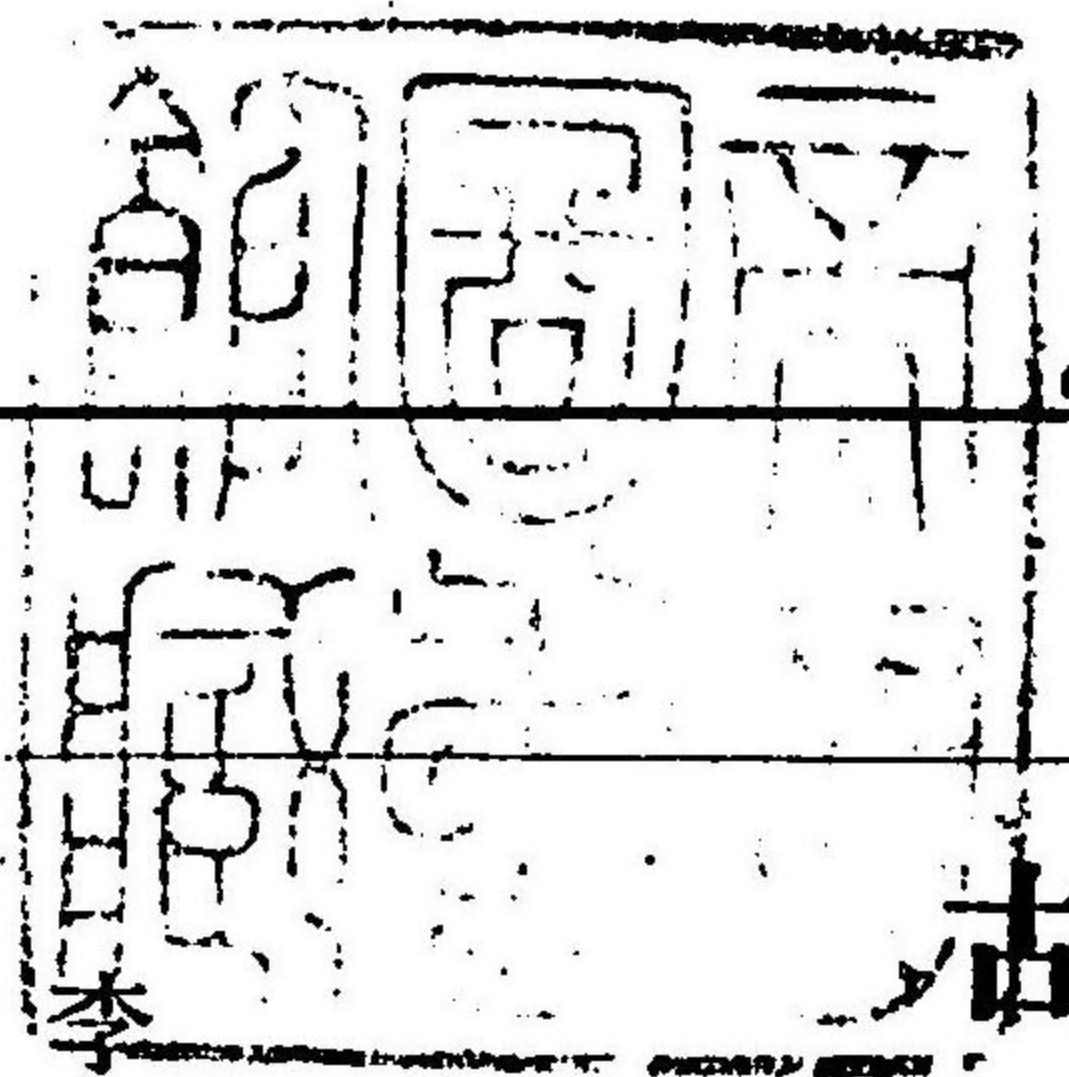
八、明妃曲	宋 歐陽永叔
九、明妃曲和王介甫	同 人
十、七夕歌	同 張文潛
十一、永和宮詞	明 吳駿公

古詩新釋

岩垂憲德著

一、蘇若蘭女史の回文錦字詩

李白の烏夜啼にいへらく「黃雲城邊鳥欲棲、歸飛啞々枝上啼、機中織錦秦川女、碧紗如烟隔窓語、停梭悵然憶遠人、獨宿空房淚如雨」と、思夫、閨怨の詩は、古來和漢の詩人間にうたはれ、彼是傑作も少からず。ここに評解せんとする錦字詩の如きは、詩としては風情曲調の妙を盡さざるも、所謂至誠信實の點に於て、たしかに他の諸作に譲らざるものあり。詞中、一面は自己の不幸を閨門の内に悔怨し、一面は丈夫の艱難を萬里の外に忠恕す。その節操の貞なる、その情



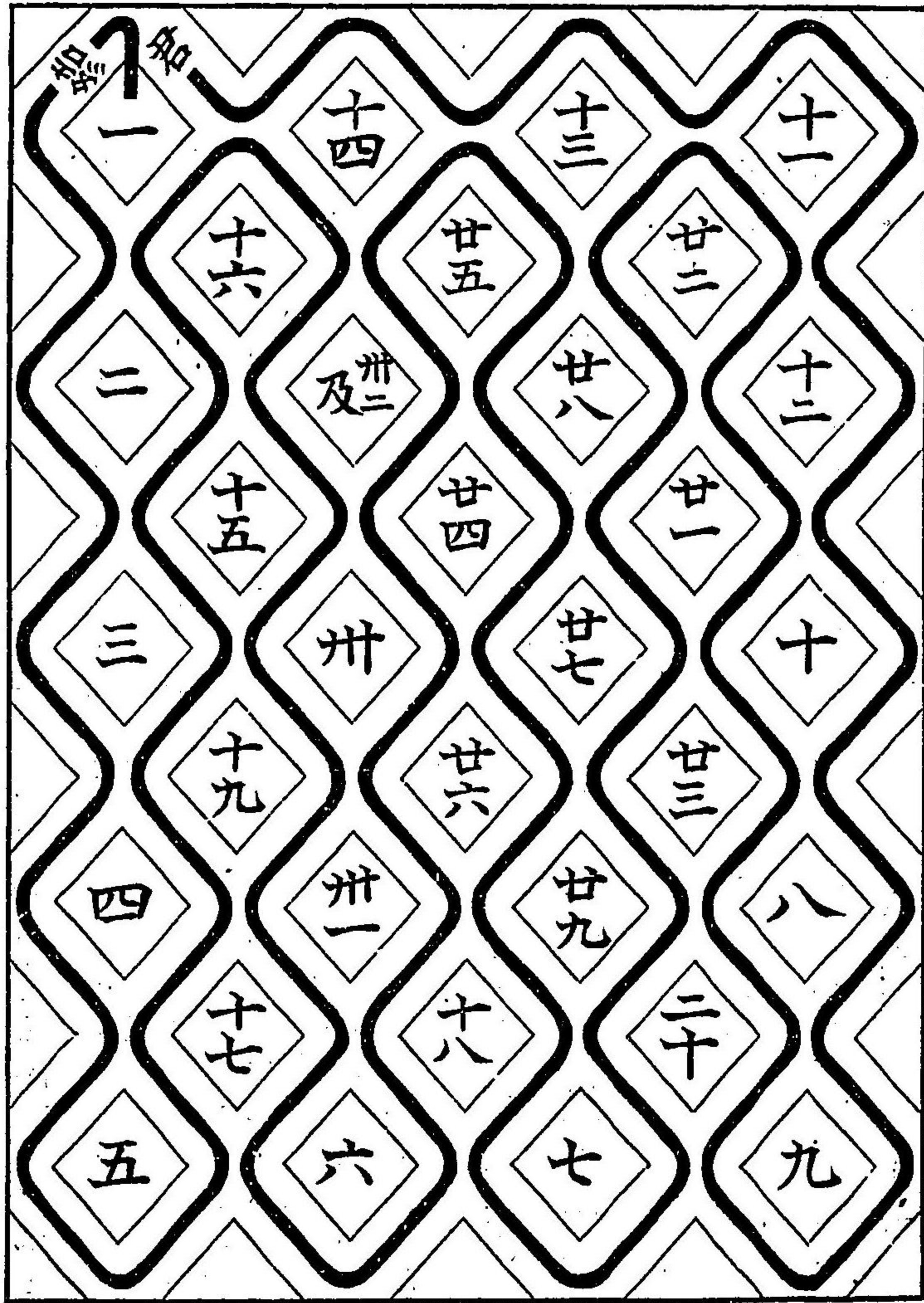
致の深き、千載の下、讀むものをして坐ろに哀憐の情を起さしむ。さてこの錦字詩は、如何にして成りしか。閨中の一婦人、遠征の良人を慕ふのあまり、回文の情詞を錦字に織り成して、天外なる良人の許に寄せしものにして、作意は思慕に出で、作法は遊戯に成りし一種の奇詩なれば、一見せし所にては、首尾紛然として讀むべからず、解すべからざるなり。昔人嘗て之を圖し、之を釋せしあり。其圖に因り、其釋に憑りて解を下さば、釋然として會得せん。今、先づ此詩の來歴を述べ、而して後、評釋に及ばむとす。

昔、支那に三國の世とて、蜀、魏、吳の三強國、天下を治めし時代ありしが、其時代の末に司馬懿といへる梟雄ありけり。字をば仲達と呼び、世々魏に仕へて、漸次勢力を得しかば、遂に魏を篡ひて、天下を一統し、國號を晋と改め、都を洛陽に奠められぬ。是を西晋の太

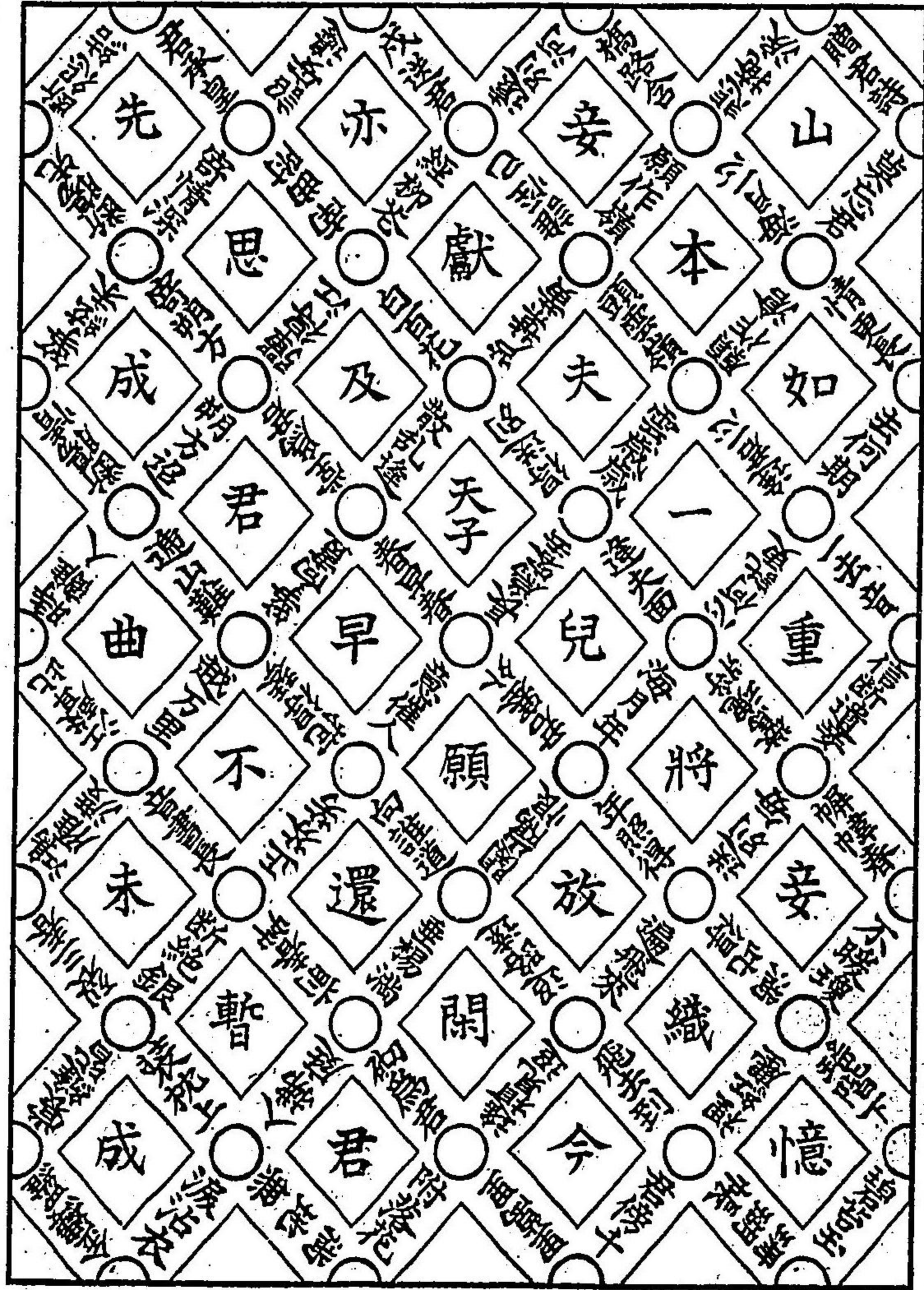
祖武帝となす。太祖武帝の後を嗣げるは、惠帝なり。惠帝のとき、蜀帝の子孫に劉淵といへるものあり。自ら漢王と稱し、年號を立て、匈奴より兵を起して、晋に攻め來りしが、其勢、破竹の如かりしかば、晋は支ふる能はず、晋帝は洛陽より長安に移りぬ。次で漢軍長安を攻め陥し、晋帝遂に降りし故、晋の諸臣相議して、司馬懿の曾孫司馬睿を君となしぬ。是を東晋の元帝となす。

此西晋と東晋との際は、支那にても最も亂れし世にして、四方の英雄蜂の如く起り、天下はさながら鼎の沸くが如くなりき。其東晋の穆帝の時、趙國の蒲洪といへるもの晋に降り、姓を苻と改めしが、其子苻健に至り、帝と稱す。是を前秦といふ。前秦の朝に竇滔といへる人、秦州の刺史たりしが、一日詔を受けて、遠く流沙に下り、北邊を成りぬ。されど北塞、事多く、年を累ぬるも、歸り來らざりしか

(圖の法讀)



(圖の文回錦織)



ば、故郷の妻、蘇蕙字を若蘭とよぶ夫を思ひ慕ひ、その懇なる情を、一章の詩に作り、自ら錦二匹を織り、字々句々を以て其文となし、一本を夫の許に贈り、一本を有司に獻ず。有司之を讀みしに、其情甚だ切なりしかば、之を秦帝に傳奏せしが、秦帝も亦深く哀憐し給ひて、竟に寶滔を邊地より召し歸さしめきとぞ。蘇蕙の果して賢夫人なりしや、否や、寶滔の果して偉丈夫なりしや否やは、暫く別問題とし、古より詩歌を以て人心を感激せしむること多きが中に、蘇蕙の如く、一婦女の詩聯を以て、皇天の哀憐を致し、萬里の良人を歸さしむるが如きは蓋し稀に見る所なり。

織錦回文の圖解

錦字縦横の文、下圖に示せるが如し。君承皇詔安邊戍といへる句より讀みはじめ、次なる讀法の圖の筋曳の如く往來して、怨結の字まで讀み至らば、中へ下り

て、一二三の數字の順に讀みて、願放兒夫及早還といふ句にて讀み終り、三十二にて止るなり。詩の圖と讀法の圖と彼是對照せば、思ひ半に過ぎん。

(注意)君の字より筋の通りに讀み、結の字に至らば中へ入り、一二三の順を追ふて、及の字に至りて終るなり。

以下、詩意を逐次解釋せむ。回文とは、句々往き反り、回り讀むがゆゑに名けり。さて此詩は、七言四十句、凡そ二百八十字より成り、四句毎に韻を易へ、七言四行を以て一解となせるが如し。即ち第一は去聲にして遇韻、第二は上聲にして旱韻、第三は文韻、第四は去聲にして霰韻、第五は入聲にして陌韻、第六は去聲にして號韻、第七は陽韻、第八は入聲にして屑韻、第九は庚韻、第十は刪韻なり。

君承皇詔安邊戍。送君遠別河橋路。含悲掩淚贈君詩。

莫忘君情更長去。(遇韻)

わが親しの夫君には、皇帝の詔命を奉じて、遠く北方の邊塞に至りて、國境を成り固めしかば、るびす等も犯しえて、至りて安靜なり。さて夫君の故郷を出で立たれしときは、妾は、馬の餞せんものと、河の橋の道まで見送りしが、かしこにて互に暇乞して、君は遙けき旅路に上られ、妾は吾家に歸りしも、遠き別のことなれば、心のうちには、別離の悲しみを含み、せきあへぬ涙を掩ひつゝ、送別の詩を贈るなり。あはれ妾は、君が情を忘るゝことなきに、君は今更に長へに去つて歸らざるか。

何期一去音信斷。遺妾幃幃春不暖。瓊瑤階下碧苔生。

珊瑚帳裡紅塵滿。(早韻)

幃幃は帳なり。布帛を垂れて、あらはに見透されぬやうにせしも

のなり。瓊瑤も珊瑚も、皆珠玉をいふ。夫の住居に、麗しき字を假りてつかひたるなり。紅の塵といへるも、玉の字に對して用ゐたるもの如し。

思ひきやわが夫の君の、一たび故郷を去りたまひてより、かくも音信を斷ち給はんとは。ひとり帳のうちに、捨て遺されし妾は、めぐり來し春の日の暖かなるにも、暖かなりとも思はれぬなり。夫の君の在さねば、誰がために灑掃すべきものぞ。されば主人の留守なるわが家は、荒れすさび、たまの階の下には、碧苔生ひ、たまの帳のうちには紅の塵みり。

此得送別每驚魂。將心何託更逢君。一心願作滄海月。一心願作嶺頭雲。(文韻)

此より下の相見といへる句に至るまでの所、婦人の心事を寫し得

て妙なり。

こゝに夫の君とわかれてより、毎日心も落ち著かず。將たまた何に
よりたれば、今更君に逢ひ見ることの叶ふべき、などはかなき事に
のみ心を勞しぬ。千里の外までも晴れて、隈なき月影の、涯りなき
青海原を照せるを見ては、夫の君の在す方をば想ひやり、一心月に
ならむと思ひ、嶺頭にたち上る雲を見るにつけても、亦一心の雲に
化せむとぞおもほゆる。

嶺雲歲歲逢夫面。海月年年照得遍。飛來飛去到君傍。
千里萬里遙相見。(霰)

妾が身もし嶺の雲とならば、歳々いく度か夫に逢はるべし。妾が身
海を照す月たらば、年々いくたびか夫に遇はるべし。月は何地にて
も、照らさぬことあるべしやは。されば妾は月となり、雲となり、宇

宙をゆきつ、もどりつして君が傍に到りて、遙に相見まほしくぞ思
はる。

迢迢路遠關山隔。恨君塞外長爲客。去得送別蘆葉黃。
誰怪已經柳花白。(陌嶺)

迢々とは、路遠き貌をいふ。關山といへる處、夫の君の在ます方に
ありと聞きつれど、路程迢々として遠く隔たりければ、月にも雲に
もあらぬ此身は、いかで行くを得む。たゞ彼方の空を眺めやるのみ
にして、君が久しく邊塞の外に客となりて在ますを、恨めしく思は
るゝなり。さて又君が去り行く別れを送りしは、昨日今日と思ひし
も月日の駒に關守なく、いつしか青かりし蘆の葉も枯れて黄ばむ
頃となりぬれば、みどりと見し柳の白き絮となりて、風にまかすも、
今更誰か怪しみ驚かむや。

百華散亂逢春早。春意催人向誰道。垂楊滿砌爲君拊。
落花滿地無人掃。(號韻)

散亂の散の字、こゝにては、散るの意にあらず。咲き亂るゝをいふ。砌は、家の下なり。拊は音撫にして、なでめぐること。詩の小雅に、拊我蓄我とあり。柳の地に垂れて、撫づるが如きより、此字を下し、ものと見ゆ。さて秋去り、冬來ると思ひしも、いつか又百華の咲き亂るゝ春に逢ひぬ。さてもく四時の行くることの早さよ。あはれ春意は、人々を浮き立たせ、もろ人はおのがじ、駈けり催し、さまざまなれど、妾は誰を相手に花見せむ。しだれ柳が、家のみぎりに満ちて、君がためになでて、塵を清め、家の側には、花が咲きても、見る人もなく、散り落ちて、地上にみちしくも、掃く人もなき我家のさまこそあはれなれ。

庭前春艸正芬芳。抱得琴箏向畫堂。爲君彈得江南曲。
附寄情深寄朔方。(陽韻)

琴は、黃帝の造りしもの、箏は、秦の將軍蒙恬の造りしものと傳へらる。こゝの琴箏は二品にあらず。箏のことなるべし。畫堂は、文飾せる家作をいへるなり。前の句に、瓊瑤、珊瑚等の字を用ゐると同じく、夫の住みし堂なれば、美しくいひなしたるなり。論語に、節を山にし、税に藻づくともあるも、造作に、彫鏘の巧みを用ゐるしことにて、此意と正に同じ、序でなれば述べつ。琴に、江南の曲あり。江南とは楊子江の南の意なり。楊子江の北を江北といひ、南を江南といふ。江南濶きこと四十里、其地暖にして、冬も春の如し。殊に景勝比ひなきゆゑ、是によそへて、琴曲に名けしものぞかし。朔方は、尙書の字面にして、猶、北方といはんが如し。流沙は北方なれば、しかいへ

詩句の意は、陽春の候、庭前の草は、正に芳ばしく、妾はせめて心の憂さを忘れんものをと、箏をば取りて、抱き上げ、夫の君の住み給ひし部屋に向ひて、江南の一曲を奏てぬ。夫は在さねど、慕ひ思へる心を寄せて、深き情を弾べ出し、夫の君の在ます朔方へ聞えよかしと念じぬ。

朔方迢遞山難越。 萬里音書長斷絕。 銀裝枕上淚沾衣。
金縷羅裳縫皆裂。(屑韻)

されど夫の君の在ます流沙の地は、萬里の朔方に在り、路、はるかにして、山越え難ければ、琴曲を寄するも、いかで達し得む。されば音信書簡の便も、久しく斷絶したりけり。銀裝枕上云々の二句は、夫の邊塞に在ます意を推し量れるなり。夫

の君もさこそ故郷の空のなつかしく、夜毎の夢も結びかね、涙に衣を沾ほし給ふらむ。夫の君のめします金縷や羅の衣裳は、定めし縫も綻び裂けつらん。鍼に絲して、補ひ綴るものもあるまじとおもひやるなり。銀を以て装れる枕といひしは、銀がなものゝ意なり。枕上といひしも、たゞ夜の意をいへるまでなり。

三春鴻雁渡江聲。 此時離人斷腸情。 箏絃未斷腸先斷。
怨結先成曲未成。(庚韻)

是亦夫の心をおもひやりて發せし句なり。三春とは孟春、仲春、季春をいふ。大なるを鴻といひ、小なるを雁といふ。舊曆の正月末より三月までに、雁がねは、聲々江を渡りて、北方の國に歸るとか傳ふれど、其が雁がねすら期を差へず歸るものを、遠く故郷を離れ、萬里の朔方に在る人の上には、定めし千々に思のくだかれて、腸を斷たる、

る情なるべし。

箏絃云々の二句は、前の爲、君彈得江南曲といふ句を受けていへるなり。妾が心、うれひの切なれば、彈づる箏の音の未だ斷えざるに、わが腸は先づ斷ち、怨めしさの胸に結ばれて、一曲の調の成し得ざるこそかなしけれ。

君今憶妾重如山。妾亦思君不暫閑。織將一本獻天子。願放兒夫及早還。(刪韻)

今となりては、夫の君にも定めし妾をおもふ情の、積りくゝて山の重さが如くなるべし。妾も君を慕ひまゐらせ、暫しのいとまもなきぞかし。こゝに我情を錦に織りなし、其一本をもつて、畏れながら天子様に奉るなり。あはれ願くは我が夫を放ちて、流沙の邊塞より早く還さしめたまひてよ。兒夫といへるは、我夫を卑下していへる

辭なり。

以上、錦字詩の大要を評釋し畢んぬ。閨中の婦女、遠征の夫を慕へる情は、さこそあらめ。されど國のため、君のために萬里の地に出陣せし夫に對し、之を勵まして、偉效をなさしむる途に出でずして、却つて區々纏綿の私情に馳られ、最親の良人をして、懦夫に終らしむるは、賢夫人といふべからず。女史が文字の美は甚だ愛すべきも、其人取るに足らざるなり。余は此評釋の初めに於て、女史の文辭の艷美に眩まされ、其節操の貞なる、其情致の深きなどと、心にもなき語を發せしが、こゝに至りて其言を取り消さざるを得ず。

終に宋の蘇軾が題織錦圖回文と元の陳基が裁衣曲とを録して參考に資す。曰く春晚落花餘碧草、夜涼低月半梧桐、人隨遠雁邊城暮、雨映疎簾綉閣空、曰く慙慙織紈綺、寸寸成文理、裁作遠人衣、縫

縫不敢遲裁、衣不怕剪刀寒、寄遠惟憂行路難、臨裁更憶身長短、只恐邊城衣帶緩、銀燈照壁忽垂花、萬一衣成人到家、侍兒小名錄にいふ。前秦の安南將軍竇滔、寵姬趙陽臺あり、之を別所に置く。妻蘇、求めて之を獲、苦だ撻辱を加ふ。滔深く之を恨めり。滔、襄陽を鎖し、陽臺と任に之き、蘇氏の音問を絶つ。蕙、悔恨自ら傷み、因りて錦を織り、回文詩、二百餘首を題す。計八百餘字、縱横反覆、皆文章を爲す。璇璣圖と名け、蒼頭を遣はし、齎して襄陽に至る。滔錦字を覽、其妙絶に感じ、因りて車徒を具し、蘇氏を迎ふ云々と。

二、白樂天の長恨歌

長恨歌は楊貴妃を歌へる敘事詩にして、情辭兼ね至れるもの、無限の風趣、無限の感慨、讀むものをして、泣かしめ、悲しましむるもの

あり。白詩中の傑作と稱せられ、夙に人口に膾炙せり。

唐の高祖より七代の孫に當れる玄宗皇帝のときは、天下泰平にして、帝も位を保たせ給ふこと四十四年、樂を極め、慾を恣にし、何事も御心のまゝなるに、歡樂極まりて哀情起るとかや、元獻皇后、開元中にうせ給ひ、帝はおもひにふし沈ませ給ふを、又々武叔妃と申す愛夫人の打つゞきてうせ給ひしより、宮中に千萬人の美人ありとも、御心にかなふ人はなかりけり。然るに楊家に女あり、世にたくひなき美人の由きこしめせど、既に御弟壽王の邸に入りぬ。されど帝は強て召し出され、御寵愛なゝめならず。誠に楊女は舉止閑冶、漢の李夫人の如かりしかば、帝は鍾愛のあまり楊貴妃となづけ給ふ。貴妃はいよゝその容を治め、其詞を敏くし、婉戀萬態、以て帝の意をむかへしかば、三千宮女の寵愛一身にあつまり、六

宮また進幸せらるゝものなかりき。かくて帝は人の憂ひ、世の譏
りをかへりみ給はず、貴妃の女色に迷ひ、國政を其從祖兄楊國忠
に委ねしかば、天下治らず、遂に安祿山の反を致しぬ。帝は難を蜀
に避けしが、途中馬嵬驛にて將士喧騒し、如何ともし難く、遂に最
愛の貴妃を縊殺せしむるに至りぬ。帝の怨恨極りなく、綿々とし
て絶えざるより長恨歌とは名けたり。

漢皇重色思傾國。御宇多年求不得。楊家有女初長成。
養在深閨人未識。

唐皇といふべきを漢皇とせしは、樂天唐の人なれば、當代を憚り
ていへるなり。唐の玄宗皇帝は、女色をかく思はずして、美人を
得んと思召さるの意。傾國とは美人のこと。漢書の外戚傳に「北方
有佳人絶世而獨立、一顧傾人城、再顧傾人國、寧不知傾城與傾國、

佳人難再得」とあり。

玄宗皇帝御位に即き給ひて、久しく美人を尋ね給ひしかど、意に
適ふものを得ざりき。時に弘農の人に楊玄琰といふあり。一女を有
し、名を玉環といふ。やしなひて、やうく筭する程の年頃となり
ぬ。玉環は親の許に養はれ、深閨とて奥まりたる一室に在りしかば、
かやうの美人といふことを、人未だ識らざるなり。以上四句を以
て一解となす。職韻を踏めり。初二句は玄宗皇帝の色を重ずるを敘
し、後二句は楊女の深閨に養はれつゝあるを敘す。玄宗の好色は、
是れ一篇の眼目にして、楊家の女は、即ち此篇の主人公なり。
天生麗質難自棄。一朝選在君王側。回頭一笑百媚生。
六宮紛黛無顔色。

天生とは、天然自然の生まれつきなり。楊女の艶麗なるは、天のな

せるにて、女のけはひなどして、時のすがたを、うつくしくしなしたるにてはあらず。麗質とは、うるはしき姿なり。難自棄は、うるはしき姿の一點の棄て所もなしとなり。されば一日選び出され、君の御かたはらにめしおかれたり。蓋し貴妃は、開元十一年に既に壽王の妃となりしが、美人のよしきこしめし及ばれて、女官になされ、太真と名けたり。而して壽王には、左衛門將韋昭訓といへる人の女をつかはされたり。貴妃ふりかへりて一たび笑めば、目元に無量の情愛生じ、愛嬌溢るゝばかりなりければ、六宮に在る三千の宮女も、貴妃のすがたにおしつけられて顔色なき様なりけり。六宮とは鄭玄、周禮を注して曰く、皇后正寢一、燕寢五、是を六宮となすと。粉はおしろい、黛はまゆずみにして、粉黛とは、化粧せし女をいふ。以上四句を二解となす。韻は同じく職なり。楊貴妃の美貌を寫せり。

第一解の四句と併せて一篇の總冒をなせり。

春寒賜浴華清池。溫泉水滑洗凝脂。侍兒扶起嬌無力。始是新承恩澤時。

冬十月より春二三月にかけ、帝は寒を避けんがため、貴妃を伴ひて、驪山の華清宮に幸し給ふ。華清宮は温湯泉の湧出する處、睿宗帝の頃までは、單に溫泉といひしを、玄宗皇帝の天寶六年華清宮と更めぬ。華清地の溫泉は、いかにもすべくとして、脂などの凝りかたまりたる如き貴妃の肌を洗ふなり。凝脂とは、詩の衛風に、碩人手如柔夷、膚如凝脂とあり。貴妃は浴後くたびれたまふを、侍兒とて傍に事へる若き女たちの、手を取り、肩にかけなどして、美しき手足のよはくとして柳の風に靡くが如し。これは是れ玄宗の開元十一年、貴妃新に玄宗に愛せ

られて、妃となりし時のことなり。恩澤の澤は、君王より恩愛を受ければ、親類までがうるほへるよりいへるなり。

以上四句、第三解、支韻を蹈めり。貴妃の浴を賜はりて、恩澤を承くるを敘す。以下四句二句相交りて章法をなせり。

雲鬢華顏金步搖 芙蓉帳暖度春宵 春宵苦短日高起

從此君王不早朝

髪をまげたるすがたは、雲の美しく、もやくと出でたるやうなり。詩の君子偕老篇に「鬢髮如雲とあり。華顔とは貴妃のみめうつくしく、春風の露を含める海棠に似たるをいふ。金步搖は首に副ふる飾にして、かんざし様のものなり。宮女となれば、此步搖を賜はるなり。是よりいよゝ位も上り、開元十二年には、はや貴妃の位になりたり。

芙蓉の帳とは、芙蓉の花などをおりつけ、ぬひつけたる帳をいふ。

芙蓉は、蓮華なり。紙にてすれば紙帳、どんすなどにてすれば、どん帳といふ心なり。春の寒き夜貴妃の冷風を感じぬ様、通宵暖帳の裡に居らしむるなり。さて秋の夜の折さへ、思中の契りは、ながしとも覚えぬを、まいて春の夜のみじかき、日高けても帳裡を離れがたかるべし。かくて君王玄宗は、貴妃の色に溺れ、政もはや思しめしよらず、世のそしりをも顧みざる程になり給ふ。古者天子、日出に於て百官百寮に面し給ふ、是を朝政といふ。天下政令の出づる所を朝といへるも此義なりとぞ。

以上四句を第四解となす。蕭韻を蹈めり。貴妃寢に御して、寵を承くること、漸く深きをいふ。末句禍亂を孕めり。

承歡侍宴無閑暇 春從春遊夜專夜

君主の御情にあづかり、君王の宴に侍り、一日の閑暇なし。花のさ
かりの春は、一しほ人の心も浮き立つ折なれば、玄宗は春遊を事と
し、貴妃はつかの間も其傍を離れず。夜は夜を專にすとは、三千の
宮女たちは、時によりて、一時御情あることもありつれど、貴妃は
一夜もかけず、御寵愛ありけるをいへるなり。

以上二句を第五解となす。馮韻を踏めり。貴妃の寵を專にせるをい
ひ、上を承けて下を起せり。

後宮佳麗三千人。三千寵愛在一身。金屋粧成嬌侍夜。

玉樓宴罷醉和春。

玄宗六宮を造り、三千の宮女を置く、是を後宮といふ。其三千の美
人、姿色を以て仕へしが、一たび貴妃の宮中に入りしより皆寵を失
ひぬ。

黄金にてかざれる宮殿成り、之に侍べる貴妃は、一しほうつくしく
夜に入れば御そばにそひ給ふ。たまの樓閣にて御酒宴もはやみ
ての後、酒に酔ひ、春のおもしろき折ふしなれば、貴妃は靜に身を
起し、心も姿もやはらぎぬ。

以上四句六解、眞韻を踏めり。寵一身に在るをいふ。

姊妹弟兄皆列土。可憐光彩生門戶。遂令天下父母心。

不重生男重生女。

杜詩にいふ、「生女猶可嫁比鄰、生男埋沒隨百草」と、貴妃一たび玄
宗の寵をほしいまゝにせしより、其姊妹兄弟皆所領を得、高位高官
に上り、光彩頓に其門に生じぬ。されば天下幾多の人の父母、楊家
を羨み、遂に男を生むを忌み、女を生まんことを希ふに至ることあ
さましけれ。さて貴妃一門の榮華は、天寶四年父玄琰に兵部尚書を

贈り、同七年冬十一月其三姉を以て國夫人となし、韓國夫人、虢國夫人、秦國夫人といふ。同九年其從祖兄釗に名を國忠と賜ひ、次で十一年相となる。

以上四句、第七解、慶韻を踏む。榮華家門に及ぶを敘す。

驪宮高處入青雲 仙樂風飄處處聞

驪宮は驪山宮なり。華清宮の在る所をいふ。入青雲は驪山の平地より高きをいふ。其高き驪山宮にて、終日酒宴を催し、仙人の樂を奏して歡樂を貪りけるが、仙樂風に翻へり、遠く四方に聞ゆるぞかし。以上二句、第八解文韻を踏む。一轉して仙樂を敘し、下段に引き入る。

緩歌慢舞凝絲竹 盡日君王看不足 漁陽鞞鼓動地來

驚破霓裳羽衣曲

靜に歌ひ、ゆるやかに舞ひて、絲竹を凝す。凝すとは、徐ろに聲を引くなり。絲は琴、琵琶、わが三絃の類、竹は笛、笙、尺八の類なり。玄宗はひねもす此歌舞を見給ひても、倦厭の色おはせず。なほもく見まほしき御様子なりけり。かゝるところに漁陽の地より安祿山鞞鼓を鳴らし攻め來りしかば、驪宮にて歌ひつ、舞ひつせし霓裳羽衣の曲も、驚破せられぬ。こは是れ天寶十四年、安祿山藩兵十餘萬を率ゐ、漁陽より起り、南して關を指し、跪きて曰く、勅を奉じ、楊國忠を誅すと。鞞鼓の聲地を動かしぬ。鞞は騎鼓なり。霓裳羽衣の曲は、西清詩話にいふ、葉法善、明皇を引きて月宮に入り、樂聲を聞きて歸る、たゞ其半を記す。會々西京府の楊敬達、婆羅門の曲を進めしが、聲調脗合せしかば、韻に便にし、二者を合して霓裳羽衣の曲を製すと。以上四句、九解となす。沃韻を踏む。歌舞歡樂未だ央ならずして、兵

鼓一聲醉夢を驚破せしをいふ。

九重城闕烟塵生。千乘萬騎西南行。

九重の都も今は兵燹にかゝり、玄宗皇帝も楊國忠の意見に由り、止むを得ず西南の方なる蜀の國へ幸し給ふ。千乘は車千兩、萬騎は一萬騎にして皆天子の軍のこと。九重とは、福記に天子門九重、關門、遠郊門、近郊門、城門、皇門、庫門、雉門、應門、路門、とあり。

以上二句、第十解、庚韻、上を承けて亂を敘し、下を起す。

翠華搖搖行復止。西出都門百餘里。六軍不發無奈何。

宛轉蛾眉馬前死。

翠華は、上林賦に建翠華之旗とあり。註に翠華は翠羽を以て葆となすなりと見ゆ。天子の旗標をいふ。翠華搖々として行きては止り、止りては行き、都を出でて西の方百餘里馬蒐驛に至りしに、六軍の

將卒進發せず、如何ともする能はず。帝其故を問はしむ。將士等答ふ、禍は楊國忠に由る。請ふ之を誅せむと。槍もて國忠の首を驛門に掲げ、併せて秦國、韓國、虢國三夫人を殺せり。而して軍尙は發せず。帝乃ち高力士をして之を問はしむ。陳玄禮對へて曰く、禍本尙ほ在り、陛下願くは恩愛を割き、貴妃に死を賜はるべしと。帝曰く貴妃常に深宮に居り、安ぞ國忠の反謀を知らんやと。高士曰く貴妃誠に罪なし。然れども將士已に國忠を殺して、而も貴妃陛下の左右にあらば、豈敢て自ら安せんや。願はくは陛下審かに之を思へ。將士安きときは、則ち陛下安からんと。帝乃ち力士に命じ、貴妃を佛堂に引きて之を縊殺し、玄禮等をして之を觀しむ。玄禮等冑を免きて罪を謝し、萬歳を呼ぶ。始めて部伍を整へて行計をなしき。あはれ宛轉たる蛾眉の美人貴妃等も空しく君の目前に斃れぬ。宛轉は

花のたをやかに曲りめぐること。蛾眉は兩眉の形曲りて、黒く愛すべきをいふ。

以上第十一解、紙韻を踏めり。

花鈿委地無人收。翠翹金雀玉搔頭。君王掩面救不得。

回首血淚相和流。

貴妃のうるはしき花のかんざしも地に棄てられて、誰も收むるものとはなく、翠翹とは翠鳥の羽なり。翠鳥も金雀も皆首飾なり。西京雜記にいふ、武帝過李夫人、就取玉簪搔頭、自此宮人搔頭皆用玉と。貴妃の美しき首飾の散亂してあはれなるさまをいふ。かくて無情の兵士等は、貴妃を梨樹に縊殺するや、玄宗はいかて其慘情を目撃するを得む。袂もて面を掩ひ、亦如何ともする能はざりき。玄宗首を回して往時を追懷し、悲哀に堪へずやありけん、血の涙せきあ

へぬこそあはれなれ。

以上四句、第十二解、尤韻を踏む。前四句と此四句とは玄宗都を逃れ、貴妃死する悲みを敘せり。

黃埃散漫風蕭索。雲棧縈紆登劔閣。峨嵋山下少人行。旌旗無光日色薄。

玄宗皇帝は、已に都に歸ることを得ずして、蜀の地に落ち給ひしが、黃塵風に吹き立てられ、風も淋しく身にしみわたれり。蜀に往く道の險しきは、雲の如く高き棧道をめぐりめぐりて、劔閣に登ることあり。劔閣は劔州の北、三十里に在り。兩岸峻拔にして、石を鑿ちて棧道を爲れるなり。又途中成都府に峨嵋山あり。高く聳えて險阻なるより人の行くこと極めて稀なり。旌旗堂々威風揚れる行軍ならで、落ち行く旅の空なれば、旗の光もうすらぎて、夕日の影も幽かなり。

以上四句、第十三解、藥韻を踏む。

蜀江水碧蜀山青、聖主朝朝暮暮情、行宮見月傷心色。

夜雨聞鈴腸斷聲。

蜀の地は水碧にして山青く、往來絶えし邊陲なり。されば帝も物に觸れ、事に接し、朝夕の情如何ありけん。行宮におはして月を見給ふにも、かの貴妃のことの慕ばれて、干々に心のくだかれぬべし。夜の雨しめやかに降りしきりて、夜番の鈴の聲を聞く折など、斷腸の念切ならむ。

以上四句、第十四解、庚韻を踏む。前解と共に玄宗の蜀に入るの光景と傷心とを寫す。

天旋地轉回龍馭、到此躊躇不能去、馬嵬坡下泥土中、不見玉顏空死處。

玄宗は蜀に蒙塵し給ひしも、天めぐり地轉じて、第二の皇子肅宗、兵を擧げ、安祿山をば伐ち平げ、帝位に即き、父玄宗を蜀より迎へしかば、帝も龍馭を廻して、都に歸ることとはなりぬ。龍馭とは、馬八尺を龍といふ、駕輦のことなり。さて帝は歸途、馬嵬原に至りしとき、貴妃の事の追慕せられて、あしづりして去る能はず。躊躇は猶豫なり。足を駐むるなり。韓愈の詩に「愛而不見、搔首躊躇」とあり。馬嵬坡下の泥土中、貴妃の空しく葬られし所、復その玉顔を見ること能はず。玉顔とは美貌なり、宋玉の神女賦に「苞溫潤之玉顔」とあり。以上四句、十五解、御韻を踏む。蜀より歸り、再び貴妃が死處を經るをいふ。

君臣相顧盡沾衣、東望都門信馬歸。

玄宗貴妃を追慕し、悲みに沈める様を見て、扈從の人たち何れも袖

をぞ沾しける。かくて帝は東の方都を望みて、馬に任せて歸りけり。
蜀は都の西南に當れば東の方といへるなり。

以上二句、第十六解、微韻を踏む。

歸來池苑皆依舊。太液芙蓉未央柳。

都に歸りて見れば、金殿玉樓荒れはて、昔のすがたなし。たゞ池苑のみは、もとのまゝにして、太液池には蓮花あり、未央宮には柳あり。榮枯はうつる世ながらも、變らぬものは蓮と柳、蓮は紅に池中に笑ひ、柳は翠に宮苑に垂れたり。

以上二句、第十七解、上を疊みて二句一轉し、舊都にかへり、宮苑、故の如きをいふ。有韻を踏む。

芙蓉如面柳如眉。對此如何不淚垂。春風桃李花開夜。

秋雨梧桐葉落時。

芙蓉の紅に艶なる色を見るときは、貴妃の面を思ひ、翠柳の風に靡くさまを見ても、貴妃の蛾眉を想ふべし。春風花開く艶陽の辰、秋雨葉落つる淒涼の際、亡き人をしのぶ身の此景物に對しては、坐る傷悲の念をまさしむものあるぞかし。

以上四句、第十八解、支韻を踏む。上を疊みて、舊物存して貴妃あらず、感を生ずるを寫す。

西宮南苑多秋草。宮葉滿階紅不掃。梨園弟子白髮新。

椒房阿監青娥老。

昔は清らを盡し、西方の宮、南方の苑も、今は荒れ果て、秋草しげく咲き亂れ、落ち葉は散りて、階に滿つれど、掃除する人としてはなく、梨園の弟子も、玄宗の蜀に蒙塵せられしより、日夜愁歎して、白髮新に生じ、椒房の奉行たる阿監は、祿山の亂後、日夜歎きに沈み

うるはしき色香もうつろひぬ。梨園の弟子とは、玄宗、平生音律を好ませ給ひ、聲音の妙手三百人を選び、梨園に學ばしむるをいふ。梨園は光化門北に在り。椒房は未央宮に在り、皇后の居る所、因りて皇后の稱となす。椒と名くる所以は、椒を以て壁に塗り、其温にして悪氣を辟くるに取り、又椒實の多きが如く、皇子の蕃衍せん義に取るなりと。阿監は宮女を掌る官なり。青娥は年若き美貌のものをいふ。秦晋の間、美貌のもの之を娥といふ。

以上四句、第十九解、皓韻を踏む。玄宗西宮に遷るをいふ。

夕殿螢飛思悄然。孤燈挑盡未成眠。遲遲鐘鼓初長夜。

耿耿星河欲曙天。

宮殿の夕暮に、螢の飛べるさまも物哀に、貴妃と別れて悵然とふさがせ給ふ帝は、獨り燈を挑げ盡して、夜もすがら少しもまどろませ

給はず。されば嘗て貴妃の侍べりしときの、春宵苦短日高起との春夜の短きも、今はなかく長くなり、一時一時に鐘、太鼓を鳴らして時を告ぐる其音も、遅々と感ぜられ、只管夜の明くるを待つなり。耿耿と明なる天の川、あはれ夜も將に明けんとして未だしきか、さても長き夜かな。

以上四句、第二十解、先韻を踏む。

鴛鴦瓦冷霜花重。翡翠衾寒誰與共。悠悠生死別經年。

魂魄不曾來入夢。

鴛は雄にして、鴛は雌、雌雄未だ曾て相離れず。玄宗嘗て貴妃の爲めに宮を建て、屋上に鴛鴦の瓦を造り、深き契りを寄せしが、其瓦も今は霜に掩はれて冷に、翡翠の羽を文にせる美しき夜具も、貴妃のあらざれば、誰と共にかせん。あはれ貴妃の面影にだに似たる

ものはあらざるか。さても帝は生きて此世に存し、貴妃は死してあの世の人となり、悠々とはるか久しく三とせを経ぬ、せめては貴妃の魂魄なりとも夢にあらはれて、共に語らましを其だに叶はぬか。以上四句、第二十一解、送韻を踏む。前四句と此四句とは思を寫して漸く切に、末句、下段に引き入る。

臨邛道士鴻都客。能以精神致魂魄。爲感君王輾轉思。遂教方士殷勤覓。

蜀國の臨邛郡の仙人にして、姓は楊、名は通幽といへるもの、鴻都の人なるが、仙術を知り、通力を得しゆゑ、よく死者の魂魄を招き致すとかや。君王の朝夕貴妃を慕はれて、輾轉の思に堪へ兼ねる由聞き、遙るく都へ上り、玄宗にまみえ、貴妃の魂魄を求めんとぞ聞ゆる。帝大に悦ばせ給ひ、此仙人楊氏をして叮嚀に求めしめぬ。輾轉と

は、右に轉じ左に反り、少しも靜かなるを得ざるをいふ。輾或は展に作る。楚辭に憂心展轉愁怫鬱とあり。殷勤は、委曲の貌、史記に殷勤之歡とあり。

以上四句、第二十二解、陌韻を踏む。道士を寫し出す。

排風馭氣奔如電。升天入地求之遍。上窮碧落下黃泉。兩處茫茫皆不見。

雲を呼び雨を起す自在なる楊仙人は、風を排し氣に馭し、虚空に入る。道家もと虚空を以て本となす。楊仙人の奔ること電の如く速なり。天に上り地に入り遍く探ぐりあるき、上は碧落を極め、下は黄泉の極に達し、貴妃を求めて已まざれど天上地下茫茫として其魂魄にめぐりあはざりき。碧落は天上をいひ、黄泉は地下をいふ。天は玄く、地は黄なり。而して泉は地中に在るより地下をいふなりとぞ。

以上四句、第二十三解、霰韻を踏む。天上地下遍く貴妃を求むれども逢はざるをいふ。

忽聞^ナ海^ノ上有^リ仙^ノ山^ト。山在^リ虛無^ノ縹渺^ノ間^ニ。

忽ち聞く東海上に三神山あり、一に蓬萊、二に方丈、三に瀛洲と、烟は深し蓬萊山、虛無縹渺の間に在り。縹渺は高遠の貌、文選海賦に「神仙縹渺餐玉清涯」とあり。虛無縹渺の間、たゞ仙人之を知り俗人之を見る能はざるなり。

以上二句、第二十四解、刪韻を踏む。楊仙人を寫し出す。虛無縹渺以下方士の誑言を見はす。

樓殿玲瓏^ト五雲^ト起^ル。其中^ニ綽約^ト多^ク仙^ノ子^ト。中^ニ有^リ一^ノ人^ト字^ス玉^ノ眞^ト。雪^ノ膚^ノ花^ノ貌^ト參差^ト是^レ。

蓬萊山上には、樓臺殿閣玲瓏として美しく、五色の景雲靉靄として

見はる。玲瓏は光輝の貌、張祐の詩に「水精宮殿月玲瓏」とあり。其樓殿の中綽約たる仙子多し。綽約は柔美の貌、仙子は仙女のこと。其仙子の中に字玉眞と呼べるあり。玉眞は貴妃の名なり。玉眞の膚の白き雪の如く、顔の艶なる花の如し。雲花參差としてたがひちがひに入り交り、其うるはしきこと言はん方なし。莊子に「藐姑之山、有神人居焉、肌膚若氷雪、綽約若處子」とあり。其仙子こそ貴妃なれ。以上四句、第二十五解、紙韻を踏む。

金闕^ノ西^ノ廂^ノ叩^キ玉^ノ扃^ト。轉^シ教^ス小^ノ玉^ト報^シ雙^ノ成^ト。聞^ク道^ノ漢^ノ家^ノ天^ノ子^ノ使^ト。九^ノ華^ノ帳^ノ裏^ニ夢^ノ魂^ノ驚^ル。

かくて楊仙人は玉眞の住所なる金造の樓閣に至り、西の廂の下に立ちて、うるはしき玉のとぼそを叩き案内を求めけり。侍女小玉といへるもの取りつきに出で、楊仙人の訪れしを更に雙成といへる

侍女をして貴妃に傳へしむ。小玉も雙成ももと西王母の侍女の名なりしを、こゝに借り用ゆ。楊仙人告げらく身は是れ漢家天子の使なりと。九華帳とは、九つ重ねたる美しき帳なり。其とばりの中に貴妃は假寐してありしが、帝の使と聞きて驚き覺めぬ。

以上四句、第二十六解、庚韻を踏む。

攬衣推枕起徘徊。珠箔銀屏遶迥開。雲鬢半偏新睡覺。花冠不整下堂來。

衣をとり、枕をかたつけ、起きてあちらこちら行きめぐり、身を圍める玉簾や、銀の屏風を押し開きたり。遶迥は連接なり、屏風を引き圍める貌。起ち出でし貴妃の姿は、美しき雲の鬢も半もつれて、顔にかゝれるさま、いとうるはしかりけり。さて貴妃は寐起の事なれば、華の如き美しき冠も正さず、堂を下りて使に接しぬ。

以上四句、第二十七解、灰韻を踏む。前の四句と此四句とは楊仙人

貴妃を認め得て、其使命を致し、貴妃喜びて堂を下るを敘す。

風吹仙袂飄飄舉。猶似霓裳雨衣舞。玉容寂寞淚闌干。梨花一枝春帶雨。

貴妃の堂を下るや、風は飄々として其袂を搖かし、恰も霓裳雨衣の舞を見るが如し。貴妃のうるはしき貌も、愁悲を含み、涙しきりに流れしたゝりぬ。欄干とは涙断えざる貌。其流涕のさまは、梨花の雨を帶ぶるに似たり。漁隱後集に梨花一枝春帶雨、桃花亂落如紅雨とあり。

以上四句、第二十八解、語韻を踏む。

含情凝睇謝君王。一別音容兩渺茫。昭陽殿裏恩愛絕。蓬萊宮中日月長。

立宗帝の遙るく使者をたまはりしは、たへがたき御なさけなり
 とて、貴妃の滿腔の情を含みて、楊仙人を見つめ、君王に謝し奉れ
 り。さて辭を更め、陛下に御別れ申してより、玉容、音信兩ながら空
 しくなり、日夜悲哀に沈み侍りぬ。嘗て昭陽殿にて厚き御情を給は
 りしも、今は蓬萊宮中に獨り無聊にすぐし、何の樂もなく誠に日月
 長しとなり。昭陽殿は華清宮の南方に在り、立宗の貴妃と管弦歌舞
 に日を送りし處なり。

以上四句、第二十九解、陽韻を踏む。前四句と此四句とは貴妃涙を
 含む容、君王に謝する情を敘す。

回頭下望人寰處、不見長安見塵霧、唯將舊物表深情、
 鈿合金釵寄將去。

常に都のなつかしさに堪へて、下の方人間界を臨みしも、帝のお

はす長安城は見えず、只、塵埃烟霧の濛々たるを見るのみなりけ
 り。實は説文に、王者封畿内縣也とあり。今、君が訪れしこのとのうれ
 しさよ、貴妃舊物を取り出して、仙人に與へ、深き情を表はせり。其
 品物は鈿合、金釵なり。鈿合はさしくし、金釵はかんざしなり。何れ
 も片時も離さぬもの、深き思を知らしめんとて、贈る心を憐み玉ひ
 てよ。

以上四句、第三十解、遇韻を踏む。貴妃の情愛を敘す。

釵留一股合一扇、釵劈黃金合分鈿、但令心似金鈿堅、
 天上人間會相見。

金釵には股角あり。鈿合には一扇あり。之を割きて、一を内に留め、
 一を君王に致す。片割の釵鈿は互の思ひ出でぞかし。今や幽明界を
 異にし、人仙相隔つるも、金鈿の堅きが如くに互の心は變らざるべ

し。會ふこゝに天上界の貴妃と、人間界の楊仙人と相見ゆるを機として、此ものを寄するなり。

以上四句、第三十一解、霰韻を踏む。人間仙境相見ること難し、只舊物もて深情を表するをいふ。

臨別殷勤重寄詞 詞中有誓兩心知 七月七日長生殿
夜半無人私語時

さて楊仙人既に貴妃の鈿合金釵を得て、將に別れんとするとき、貴妃は暫く引とめて、更に殷勤に言傳をしぬ。其は鈿合金釵の贈り物のみにては、帝には御信用あるまじければ、嘗て七月七日華清宮中の長生殿にて、帝と妾と誓ひてし私語は、夜半人なき折のことなれば、只二人の間にて知れるのみ。こは天寶十年玄宗皇帝楊妃が肩に憑りて、天を仰ぎて牽牛織女の事に感じ、密に相誓ひぬ、願くは世々

夫婦たらんと。

以上四句、第三十二解、支韻を踏む。

在天願作比翼鳥 在地願爲連理枝 天長地久有時盡
此恨綿綿無絕期

世々夫婦となり、もし禽鳥と化し、天に在らば、夫婦各一羽にして、相比びて飛ぶ比翼の鳥とならん。もし草木となり、地に在らば一樹たゞ二枝の脈理を連接して生ずる連理の枝とならん。かゝる七月七日の夜半の私語は、誰も知る人のなきなれば、之を我にあひし證とし歸らるべし。あはれかく誓はれし玄宗貴妃の間も、今や幽明相隔て、人仙界を異にして、恩愛遂に絶ゆるなり。天は長へに地は久しきも、何時か盡くるなしとも保し難し。されど玄宗貴妃幽明界を異にせる恨は、綿々として何億萬年經とも絶ゆる期なかるべし。

し。會ふこゝに天上界の貴妃と、人間界の楊仙人と相見ゆるを機として、此ものを寄するなり。

以上四句、第三十一解、靱韻を踏む。人間仙境相見ること難し、只舊物もて深情を表するをいふ。

臨別殷勤重寄詞 詞中有誓兩心知 七月七日長生殿
夜半無人私語時

さて楊仙人既に貴妃の鈿合金釵を得て、將に別れんとするとき、貴妃は暫く引とめて、更に殷勤に言傳をしぬ。其は鈿合金釵の贈り物のみにては、帝には御信用あるまじければ、嘗て七月七日華清宮中の長生殿にて、帝と妾と誓ひてし私語は、夜半人なき折のことなれば、只二人の間にて知れるのみ。こは天寶十年玄宗皇帝楊妃が肩に憑りて、天を仰ぎて牽牛織女の事に感じ、密に相誓ひぬ、願くは世々

夫婦たらんと。

以上四句、第三十二解、支韻を踏む。

在天願作比翼鳥 在地願爲連理枝 天長地久有時盡
此恨綿綿無絕期

世々夫婦となり、もし禽鳥と化し、天に在らば、夫婦各一羽にして、相比びて飛ぶ比翼の鳥とならん。もし草木となり、地に在らば一樹たゞ二枝の脈理を連接して生ずる連理の枝とならん。かゝる七月七日の夜半の私語は、誰も知る人のなきなれば、之を我にあひし證とし歸らるべし。あはれかく誓はれし玄宗貴妃の間も、今や幽明相隔て、人仙界を異にして、恩愛遂に絶ゆるなり。天は長へに地は久しきも、何時か盡くるなしとも保し難し。されど玄宗貴妃幽明界を異にせる恨は、綿々として何億萬年經とも絶ゆる期なかるべし。

以上四句、第三十三解、支韻を踏む。貴妃の詞を敍し、恨の餘々として絶えざるをいふ。全篇凡て百二十句、首尾八句を用ひ、中間四句二句相交つて章法をなす。あはれ玄宗皇帝は登極の初は、賢に任じ、能を使ひ、施政大に見るべく、誠に一世の明君なりしを、元獻皇后失せ給ひしより、一たび武叔妃に迷ひ、二たび楊貴妃に溺れ、國を誤り、民を傷ふに至る、女禍の慘、古今東西其軌を同くすと謂ふべし。

三、白樂天の琵琶行

琵琶行も白樂天の傑作にして、其抑揚頓挫、流離沈鬱の態は、宛然として琵琶哀怨の聲なり。蓋し琵琶を假り、胸中の不平を寫し、ものならむ。樂天の自序に據るに、唐憲宗帝の元和十年、樂天は左遷せられて、九江郡の司馬となり、都離れし潯陽城に空しく月日を送

りしが、翌年の秋、客を湓浦口に送る事あり。湓浦口は九江府城西にあり。一名盆水と名く。相傳ふ、昔、人あり、此處にて銅盆を洗ひしに、水暴に漲り、盆を失せしかば、直に水に投じて之を取る。一龍の盆を啣めるを見、之を奪ひて出づ。故に盆水と名くとぞ。船中夜琵琶を彈ずるを聞く、音響清亮として金聲の如く、京風の調なりしかば、鄙の境にかゝる曲を操つるは、如何なる人ぞと其人を問へば、果して長安の娼女にして、嘗て琵琶を穆氏曹氏の二善才に學び、年長け、色衰へ、身を委ねて商人の婦となり、飄泊して此地に在るものなりと物語りぬ。樂天は此地に官すること二年、恬然として自ら安ぜしが、娼女の此言に感じ、始めて遷謫の意あるを覺え、遂に六百十六言の詩を作りて之に贈り、名けて琵琶行といふ。俳人其角の讀琵琶行の句に「十五から酒を飲出てけふの月」とあり。十五に少年

の時を言ひ、酒に全盛を寫し、けふの月に零落をあらはす。妙といふべし。

此詩の韻法は、首より中間に至る迄は、四句二句參錯して章法をなす。蓋し事繁くして句勢亦促り、音節自ら短促なるべし。中間娼女の語を敘するに至りて、一韻數解を疊み下す。後又自ら敘するに至りて、亦長段一韻を用ひ、語長うして音節亦自ら寛かなり。

潯陽江頭夜送客。楓葉荻花秋瑟瑟。主人下馬客在船。舉酒欲飲無管絃。

潯陽江は九江府城の北に在り。珉山より發し下流すること四十里、彭蠡湖の水を合せ、東流して海に入る。瑟瑟は説多し、或はいふ長慶集註に半紅半白の貌とありて、風葉紅に荻花の白きをいふなりと。されど江頭客を送るは夜なり。夜に當りて其色辨じ難ければ、

やはり秋風の淋しき意と解する方可ならむ。

樂天は親しの友の船出を送らむと、潯陽江に馬を走らせしが、折しも秋の夕まぐれ、楓葉紅に、荻花は白く、秋風蕭瑟として物の哀を覺えけり。客を送る主人樂天は馬を下り、將に發せんとする客は尙ほ船に在り。やがて別を惜しむ祖道の宴も開かるれど、酒を助くる絲竹の調へなし。

四句事を記す。韻は質、先なり。無管絃の三字は下文琵琶の伏筆をなし、後段の潯陽地僻無音樂、終歲不聞絲竹聲の句に應ず。

醉不成歡慘將別。別時茫茫江浸月。忽聞水上琵琶聲。主人忘歸客不發。

茫茫は廣大の貌、古詩に四顧何茫茫と見ゆ。琵琶は手を以て琵琶する彈き方より因て以て名となす。手を前に推すを琵と言ひ、後に引

くを琵琶と言ふ。長さ三尺五寸は天地人と五行とに法り、四絃は四時に法る。其起原を詳にせずと雖、漢代胡地に起りしものならむ。釋名に枇杷本出於胡中馬上所鼓也と見ゆ。

盃の數重なりて、醉は醉へども、管絃の興なくて、別離の心を慘ましむるのみ。名残は盡きじ、いざ別れんと、首を回せば雲水茫茫として涯なく、江心に一輪の月を浸して、夜色淒涼たり。折しも水上錚錚と思懸けなく琵琶の聲しければ、主人歸るを忘れ、客人も發し兼ねて聞き居たり。

此一解は琵琶を寫し出す。韻は月なり。妙音天外より落ち、哀境を脱して歡境に入る。

尋聲暗問彈者誰。琵琶聲停欲語遲。移船相近邀相見。猶抱琵琶半遮面。添酒回燈重開宴。千呼萬喚始出來。

琵琶の聲の聞ゆる方に船を漕ぎ寄せ、暗に問ふ彈せらるゝは誰ぞと。暗問とは其人を見ずして、其聲を聞けばなり。李白春夜洛城聞笛詩に誰家玉笛暗飛聲、散入春風滿落城とあり。問はれて撥音暫しやめ、答へんとして尙ほ言を出し兼ねたりと見ゆ。白樂天等は喜びて船を移し、邀へて相見え。琵琶を肴に又宴を開かんと、一曲所望しけれども、琵琶の彈手は應へせず。千度萬度たび重ね、始めて此方の船に來りしが、尙もまばゆく思ひけん、琵琶もて半は面をかくしたり。恰も是れ雲破れて美人山月を含むの致あり。

首二句は彈者を問ひ、後の四句は彈者を邀ふ。韻は支、霰なり。轉軸撥絃三兩聲。未成曲調先有情。絃絃掩抑聲聲思。似訴平生不得志。低眉信手續續彈。說盡心中無限事。琵琶の軸をさりと轉じ、絃の調子をはからんと、一聲二聲撥ひ

たり。未だ曲にも入らざれと、音色に先づ風情あり。王融が琵琶の詩に掩抑有奇態、悽緒多好聲と、四絃掩抑次第に曲に移りしが、平生心の中に潛める幽怨の深き思ひを絃に寫して訴ふる如し。面を傾け眉を低れ、手に從ひて續々と搔き鳴らし、心中無限の怨恨を四筋の絲に説き盡しけり。

彈者の情態を寫す。韻は庚、寅なり。

輕攏復然抹復挑。初爲霓裳後六么。太絃嘈嘈如急雨。

小絃切切如私語。

霓裳は曲名、長恨歌に見ゆ。永和宮詞の處にも釋せり。西清詩話にいふ葉法善明皇を引きて月宮に入り、樂聲を聞きて歸りしが、但、其半を記す。會々西京府の楊敬遠婆羅門の曲を進む。聲調脗合す。之を接して韻に便し、二者を合せて霓裳羽衣の曲を製すと。六么は琵琶

琵琶名にして、貞元中庚崑崙の作りし所とかや。嘈々は聲衆なり。

切々は聲急なり。

琵琶を彈ずる、或は輕く或は緩く、攏へ撚りて絃を操り、調を成す。

初は霓裳の曲を彈じ、後には六么の曲を奏す。大絃の聲は急にして、村雨の一時に下れるが如く、小絃の音は細にして聲を忍びて囁くに似たり。

前二句曲名を點じ、後二句絃聲を寫す。韻は蕭、語なり。

嘈嘈切切錯雜彈。大珠小珠落玉盤。間關鶯語花底滑。

幽咽泉流水下灘。

間關は猶ほ展轉の如し。鳥の聲の和譜して、節面白く鳴くをいふ。幽咽は流の屈曲回結して聲あるをいふ。大絃の急にして嘈々たると、小絃の細にして切々たると、錯雜してかき鳴らす其聲は、大小珠玉

の盤中に落ちまろぶが如し。琵琶の聲の和暢なるは、谷間を出でし鶯の花底に間關たるが如く、琵琶の聲の凄切なるは、巖に咽ぶ流泉の灘を下りて落つるに似たり。

上文を疊みて細かに絃聲の流滑を寫す。韻は寒なり。

水泉冷澁絃凝絶。凝絶不通聲暫歇。別有幽愁暗恨生。

此時無聲勝有聲。銀瓶乍破水漿迸。鐵騎突出刀鎗鳴。

絃聲斷續の處は、水泉の清冷澁滯して、流聲の暫く聞えざる如きも、別に幽愁暗恨の生じて、聲なきも聲あるに勝り、言に言はれぬ風情あり。絃聲暫しやみ、又急に撥へば、激しき勢は、銀瓶の乍ち破碎せられて水迸り、千軍萬馬の戰場に鐵騎突出、刀鎗鳴るの響あり。聲歇て又聲あるをいふ。韻は屑、庚なり。

曲終抽撥當心畫。四絃一聲如裂帛。東船西舫悄無言。

唯見江心秋月白

彈じ終り撥を抽き胸に當て、暫し思案の體なりしが、四絃をはらりと撥ひたる一聲は、宛ら帛を裂く如し。東の方なる船も、西に繋げる船も、琵琶の曲に感じけむ、靜まりかへりて更に音なく、唯見る秋月皎々水に印して明かなるを。

曲終るを絃し、江月を寫して上に應ず。韻は陌なり。

沈吟收撥插絃中。整頓衣裳起歛容。自言本是京城女。家在蝦蟆陵下住。十三學得琵琶成。名屬教坊第一部。

蝦蟆陵は萬年縣の南、六里にあり。西京記にいふ蝦蟆陵は、もと董仲舒が墓なり。武帝宜春苑に幸するるとき、毎に此陵に至りて馬より下る。時に之を下馬陵と謂ふ。歳遠くして訛りて蝦蟆陵となるなりと。教坊は唐開元二年玄宗皇帝の置きし所、之を左右二坊に分ち、俳

優雜劇を掌らしむ。

琵琶を弾じ罷め、獨り沈吟撥取りて絃中に挿みしが、やがて衣裳をひきつくりひ、容儀を正していへらく、今は何をか包み申さむ、妻は本は都の生れにて、家は蝦蟇の陵下に在り。指折り數ふれば、十三の年まだ若き其頃よりして、琵琶に心を寄せ、其名は早く教坊申第二に數へられぬ。

韻は東、遇なり。

曲罷常教善才服。

粧成每被秋娘妒。

五陵年少爭纏頭。

一曲紅綃不知數。

鈿頭銀篋擊節碎。

血色羅裙翻酒污。

善才（曹保の子にして、唐代琵琶の名手なり。因りて曲師の稱となる。秋娘は杜秋娘といへる美人にして、李鐵の妻なり。朱粉を施さずして自ら美容ありとぞ。一説に秋娘は妓女の老なりと。五陵は漢

の天子を葬る處、高帝は長陵、惠帝は安陵、景帝は陽陵、武帝は茂陵、昭帝は平陵なり。五陵の邊、豪富の家多し。故に富豪の稱となす。纏頭は歌舞するものに與ふる祝儀なり。書言故事に歌舞者に賜ふ利物を錦纏頭といふとあり。杜詩にも樽前應有錦纏頭など見ゆ。鈿頭銀篋は鈿は簪をいひ、篋は櫛をいふ。

一曲彈じ終れば、當時名を得し善才も其妙技に服し、化粧成りて酒席に待れば、盛を極めし秋娘にも妬まるゝ程なり。五陵の方々の祝儀は、紅綃前に堆く、鈿頭銀篋節を撃つて碎け棄て、紅の裙も酒に汚さるゝ事さへありき。韻は前と同じく遇なり。

今年歡笑復明年。秋月春風等閒度。弟走從軍阿嬖死。暮去朝來顏色故。門前冷落鞍馬稀。老大嫁作商人婦。

阿姨は阿は阿母阿保の阿にして、付け字なり。姨は母の姉妹なり。宴に侍り曲を弄び、今年も歡笑、明年も同じ娛樂に日を送り、世は何時迄も斯かるべしと、秋月春風いたづらに過し、が、弟は軍に従ひ復た還らず。阿姨も間もなく世を去りて、誰を頼まむすべもなし。かくて暮去り、朝を迎へし年月に、昔の色香も衰へて、老の波そふ影慚しく、門前いつしか冷落し、五陵の人も遠ざかり、世渡る術も盡はて、流の末は買人の妻とはなりぬ。韻は亦遇なり。

商人重利輕別離。前月浮梁買茶去。去來江口守空船。
 遠船明月江水寒。夜深忽夢少年事。夢啼妝淚紅闌干。

浮梁は縣名、饒州に屬し、茶の産地なり。闌干は涙の縦横に流るゝ貌、長恨歌に玉容寂寞淚闌干とあり。

商人の常として利を重じて、別離を輕じ、遇合の情、紙よりも薄く、去ぬる月茶を買はんとて、浮梁に旅立ちし其日より、風の便もあらざれば、浦船に獨り待ちわび、江口をば漕ぎ行く船に目を留めて、夫の歸るを望みたり。操を照らす明月は、船を遠りて色清く、水に映りて影寒し。夜深け空船の中に假寐すれば、昔の事の夢に見え、胸もはりさく思ひして、血淚枕を漬しけり。娼女の物語こゝに終る。韻は遇、先なり。

我聞琵琶已歎息。又聞此語重唧唧。同是天涯淪落人。
 相逢何必曾相識。

唧々は嗚咽の聲なり。文選促織の詩に唧々復唧々と見ゆ。嚮に我琵琶の聲を聞いて嘆息せしに、更に又商婦の身上話に重ねて憂を催せり。商婦も本は京都の人、我も貶謫せられて、都より此地に來れ

るなり。同じく是れ天澤淪落の人、我等が胸中は、故人千里に相遇ふ思ひあり。何ぞ必ずしも曾て相識りし人に限らんや。

嘆息の意を寫し、下段を起す。韻は職なり。

我從去年辭帝京。謫居臥病潯陽城。潯陽地僻無音樂。

終歲不聞絲竹聲。住近湓江地低濕。黃蘆苦竹遶宅生。

首を回せば去年我謫せられて帝都を辭し、此潯陽城にさすらひしより、鬱々として病に臥すのみ。潯陽の地はもと僻陬にして音樂なく、一歲一度も絲竹の調を聞かず。まして住居は湓江に近く、地勢低く濕氣多く、黃蘆苦竹の類生ひ茂り、いよせまこと極りなし。韻は庚なり。

其間且暮聞何物。杜鵑啼血猿哀鳴。春江花朝秋月夜。

往往取酒還獨傾。豈無山歌與村笛。嘔啞喞晰難爲聽。

杜鵑啼血は杜鵑、陰曆三四月の間、夜啼て且に達す、其聲哀し、吻血ありて草木を漬すより啼血といへるとぞ。

羅鄴の詩に聲々啼血向花枝と見ゆ。嘔啞喞晰、嘔啞は小兒語を學ぶなり。喞晰は聲、繁細の貌、其音の俗調にして聞くに足らざるをいふ。

蘆竹穢雜の間、且暮に聞くものは何ぞ。杜鵑は血を吐きて哀を添へ、哀猿は叫びて腸を斷つのみ。陽春江上花開けし朝、秋風梧桐月明なる夜は、友なきも往々酒を取りて、獨り自ら傾む。獨り酌む時に當りて、豈山樵の歌と村童の笛と無らむや。されど嘔啞喞晰耳に入れど、聽くに堪へず。

韻は前と同じく庚なり。

今夜聞君琵琶語。如聽仙樂耳暫明。莫辭更坐彈一曲。

るなり。同じく是れ天運淪落の人、我等が胸中は、故人千里に相遇ふ思ひあり。何ぞ必ずしも曾て相識りし人に限らんや。嘆息の意を寫し、下段を起す。韻は職なり。

我從去年辭帝京。謫居臥病潯陽城。潯陽地僻無音樂。終歲不聞絲竹聲。住近湓江地低濕。黃蘆苦竹遶宅生。

首を回せば去年我謫せられて帝都を辭し、此潯陽城にさすらひしより鬱々として病に臥すのみ。潯陽の地はもと僻陬にして音樂なく、一歳一度も絲竹の調を聞かず。まして住居は湓江に近く、地勢低く濕氣多く、黃蘆苦竹の類生ひ茂り、いぶせきこと極りなし。韻は庚なり。

其間且暮聞何物。杜鵑啼血猿哀鳴。春江花朝秋月夜。往往取酒還獨傾。豈無山歌與村笛。嘔啞喞晰難爲聽。

杜鵑啼血は杜鵑、陰曆三四月の間、夜啼て旦に達す、其聲哀し、吻血ありて草木を漬すより啼血といへるとぞ。

羅鄴の詩に聲々啼血向花枝と見ゆ。嘔啞喞晰、嘔啞は小兒語を學ぶなり。喞晰は聲、繁細の貌、其音の俗調にして聞くに足らざるをいふ。

蘆竹穢雜の間、且暮に聞くものは何ぞ。杜鵑は血を吐きて哀を添へ、哀猿は叫びて腸を斷つのみ。陽春江上花開けし朝、秋風梧桐月明なる夜は、友なきも往々酒を取りて、獨り自ら傾む。獨り酌む時に當りて、豈山樵の歌と村童の笛と無らむや。されど嘔啞喞晰耳に入れど、聽くに堪へず。

韻は前と同じく庚なり。

今夜聞君琵琶語。如聽仙樂耳暫明。莫辭更坐彈一曲。

爲君翻作琵琶行。感我此言良久立。却坐促絃絃轉急。
 淒淒不似向前聲。滿坐聞之皆掩泣。就中泣下誰最多。
 江州司馬青衫濕。

今宵圖らずも君が調ぶる琵琶を聞き、仙境に入りて妙音を聞くが如く、耳も暫く爽かなり。一曲聽て猶ほ足らず、辭む事なく更に又、我等の爲に一曲を弾かれよ。我も亦君の爲に琵琶行の詩を作りて相贈らむと。賈人の婦は樂天の言を聞いていたく感じけん、遽にも辭し兼ね、暫し立ちて思へる色ありしが、又坐して心の限り、手の力、撥音急に促せば、琵琶の聲、淒々また淒々、以前に益して哀さ一きは深かりき。船中の人々いづれも感にうたれ、泣を掩うて竝み居しが、中に就て涙の落つる誰が最も多き、即ち是れ江州司馬の白居易にして、胸一杯の感慨に、涙の雨のふりしきり、袖も衣も濕ひぬ。

末六句緝韻を用ひ、再び彈ぜしめて、滿坐泣下るを敘す。

四、杜子美の麗人行

杜甫の詩に「虢國夫人承主恩。平明騎馬入宮門。却嫌脂粉汗顔色。淡掃蛾眉朝至尊。」と唐の楊太眞は、玄宗皇帝の鍾愛斜めならずして、天寶の初には、遂に册せられて貴妃に進みぬ。貴妃に三姉あり、韓虢、秦の三國に封せられ、何れも國夫人と爲り、宮掖に出入し、恩寵聲焰天下に震ひ、脂粉の費を賜はる歳毎に錢百萬、楊家一門の榮華は、諸人の羨む所なりしが、こゝに忌はしきは、虢國夫人の品行修らで、楊國忠と亂りがはしく、第宅を隣りして往來心のまゝに、人の見る目も憚らぬことなり。入謁の折など、二人して同じく馬に騎り、轡を竝べて道中を馳する、いかに醜くかりけむ、見る人、目を掩

はぬはなかりけり。杜子美因りて麗人行を作りて之を刺る。全篇富麗の事を道ひ、驕貴の氣象を形容して、宛然として目に在り。末句微意を以て諷刺を寄す。

韻は眞韻にして毎句押韻す。たゞ中間兩處韻を押さざる所あり。

三月三日天氣新 長安水邊多麗人 態濃意遠淑且眞
肌理細膩骨肉勻

三月三日は上巳なり。長安は古の雍州なり。唐の開元中に曲江を疏鑿して勝境となす。江邊、菰蒲蔥翠、柳陰四に合ふ。而して都人の此地に遊賞するは、中和上巳の節より盛なるはなし。

三月三日天氣和暢して晴光新なるとき、長安の都は曲水流觴の宴方に盛に、聚り來れる多くの美人の姿容濃やかに、意象迫らず、もの靜にして而も眞貞なり。肌膚は肌理こまかに潤ひ、肥えもせず瘦

もせぬ程よき骨肉なりけり。意遠は宋玉の神女賦に意似近而既遠兮とあり。淑且眞は婦人の美德、蓋し反言以て之を刺れるなり、骨肉勻は所謂血足榮膚、膚足飾肉、肉足冒骨、長短合度などいへる類なり。

繡羅衣裳照暮春 盛金孔雀銀麒麟 頭上何所有
翠爲釵葉垂髮唇 背後何所見 珠壓腰袂穩稱身

是れ麗人裝飾の美を説く。盛金孔雀は薄金を盛め、孔雀に作り、衣上の紋に貼したるものなるべし。銀麒麟は銀もて麒麟を作り、繡羅の上に印紋せるならむ。集註に孔雀麒麟指首飾とあれど、下句に頭上何所有とあれば、首飾をいへるにはあらざるべく、上句に接して、衣裳の飾を言へるなるべし。翠爲釵葉、釵葉は婦人鬢邊の花にして、翠羽もて之を飾る、其狀輕微なり。珠壓腰袂、袂は裾なり。腰

扱は裾の上に繋る帯なり。帯に珠を綴りて垂れしめず故に、束帶すれば珠は腰を壓して連るなり。穩稱身は寛狭度に合ひて、闊からず窄からざるなり。

其裝飾の美なるは、繡羅を裁して衣裳とし、燦爛として暮春の光輝に相映じ、蹙金の孔雀、銀の麒麟、一層人の目を引けり。頭上には罽葉を装ひて、翠花の飾、鬢唇を蔽ひ、背後には珠の腰扱連りて、寛狭度に合へり。一拙老人が拮維編にいふ、此下二逸句あり、曰く足下何所著、紅渠羅鞵穿、鍙銀云々と。一幅美人の畫なり。

就中雲幕椒房親。賜名大國統與秦。

椒房は漢官儀に皇后の居を椒房と稱す、山椒を末して土に和し、壁に塗る。性温にして又能く邪惡の氣を僻くるに取ると。又椒は實多きものにして、詩の唐風に椒聊之實、蕃衍盈升といふ義を取り、皇

後の多く皇子を誕生あらんを祝して塗るなりとぞ。皇后の所居のみならず、宮人の居をも稱するは用例なり。

曲江の邊、麗人多き中に就て、特に富麗なるは、雲幕の中に坐せる椒房、即ち楊貴妃の親にして、大國の統と秦との國夫人に封ぜられし人々なり。雲幕とは幕を設け張り、風にまかせ翮々と飄へる雲の如きよりいへり。貴妃に三姨あり、こゝに統秦の二姨のみ擧げしは、韓國夫人は早世し、此二人のみ聲焰天下を傾くればなり。

紫駝之峯出翠釜。水精之盤行素鱗。犀筋厭飫久未下。

鑿刀縷切空紛綸。

是れ飲食の驕奢をいふ。紫駝は即ち紫駝なり。駝の脊上に一肉の噴起して高き處あり、形山峯の如し。其峯肉の味最も美なり。行素鱗は素鱗の魚を鱠として、水晶の盤に盛りて供ふなり。犀筋は酉陽雜

俎に安祿山恩寵比なし、其賜ふ所金平脫犀頭の匙筋あり云々と。鑿刀は文選西征の賦に饗人縷切、鑿刀若飛とあり。鑿は刀上の鈴にして、魚を切るとき節に應じて鳴るなり。

厨膳の奢れるをいへば、紫駝の峯肉を宰して、翠色の釜中にて烹出したるを供し。素鱗の魚を鱠として、水晶の盤に盛る。かく山海八珍の美味丘山の如くなれど、矜泰の餘り、厭ひ飫きて心に好める品だになく、何をがな口にせんと、犀筋を留めて膳中を視まはせど、箸を下す所なし。されば調理人の鑿刀もて縷の如く切り作れる膾も、嘗て食ふなく、空しく紛綸として備ふるのみ。

黃門飛鞞不動塵。御厨絡繹送八珍。簫鼓哀吟感鬼神。賓從雜選實要津。

中黃門は奄人の禁中に居るものにして、黃門の中に在りて給事す

るなり。奄人は宦官をいふ。鞞は馬勒なり。

黃門の閹人、鞞を執りて馬を御す、其疾きこと飛ぶが如きも、路上は至つて清肅にして、塵を揚ぐることなし。こは人の避けて近寄るなく、供の整ひて擾るゝなければなり。驕貴のさま想ひ見るべし。天子の膳所よりは中使絡繹として相接し、絶えず八珍の養物を送り來り、水邊の行遊には簫鼓を鳴らして、音樂を吹奏し、其聲清亮にして虚空に徹し、餘音嫋々行雲を遏むとやいはむ。嘹唳の音、哀吟の響、幽冥の鬼神を感格せしめむばかりなり。かくて衆賓の虢國夫人に従ひて遊べるもの、雜選と衆多にして追隨後るゝを恐るゝが如し。而して何れも皆要津に當れる顯貴の人々なり。實要津は古詩に人生寄一世、奄忽若塵埃、何不策高足、先據要路津とあり、顯貴の官に居て權に當るものをいふ。

後來鞍馬何逡巡。當軒下馬入錦茵。楊花雪落覆白蘋。青鳥飛去啣紅巾。炙手可熱勢絕倫。慎莫近前丞相嗔。

後來鞍馬云々の二句は、虢國夫人の氣勢洋々と自得し、傍若無人の有様を寫せるなり。虢國夫人の後方に從ひて來れるは、鞍置きて裝へる馬に騎りたるが、何事にか逡巡として進み得ぬさまなり。其は何故かといふに、夫人曲江の邊に至りて、憩息の處の亭軒に當り、馬より下りて、豫て設け置きたる錦の茵の中に入りて坐するに因り、後に從ひ來れる馬の控へ停るに由るなり。唐の世、曲江を遊覽の勝境となせしかば、亭軒處々に多かりしならむ。當軒の軒は軒堂なり、一説に當軒は軒に臨むの意なり。軒は車廂なり、卿の車を犀軒といひ、夫人の車を魚軒といふ。魚皮を以て飾りとなせばなりと。此説或は然らんも、此處にては安ならざるが如し。

楊花雪落云々、一時見る所の景色をいふ。上巳の時節、楊花既に發け、雪の如くに散り飛びて、水上に落ち白蘋を覆ふなり。青鳥は飛び來りて、婦人頭上に飾れる紅巾を啣む。二句暮春景物花鳥相親むを見て、遊人敢て仰ぎ見ず、一時氣燄畏るべきをいふ。青鳥の出處は、漢武故事に七月七日武帝承華殿に於て齋せしとき、忽ち青鳥一羽西方より飛び來りしかば、帝、東方朔に問ひしに、朔答へて曰く、是れ西王母至らんとするなりと、頃ありて王母紫雲の輦に乗り、五色の斑龍に駕して至る。一一の青鳥あり、夾みて王母の傍に侍りぬ云々と見ゆ。

虢國秦國兩夫人、威勢の熾盛なること炎焰の如し、手を炙りなば熱かりなむ。其勢傍若無人にして、比倫を絶したり。言を寄す當世の士大夫よ、慎みて虢國夫人の側に近前すること勿れ。虢國夫人新に

寡となるも、眞の寡婦にあらず、素より丞相楊國忠に愛狎せらるるなり。さればもし誤つて近前せば、丞相の嗔に遇ふべきぞ、畏るべしと。戲謔を以て諷刺の意を寓せしなり。説く者或は曰く、末句は士大夫楊氏の黨を譏切して、丞相の爲に嗔られて、禍害を取ること勿れとの意をいへるなりと。恐らくは子美の本意を知り得ぬ言なるべし。

五、蘇子瞻の續麗人行

東坡の自註にいふ、李仲謀の家に周昉の畫ける背面欠伸の内人あり、極めて精し。戲に此詩を作ると、内人は宮人なり、妓女の宜春院に入る、之を内人といふ。

杜子美の麗人行は、専ら虢秦の二國夫人を指し、東坡の此篇は獨り

太眞を指せり。

深宮無人春日長。沉香亭北百花香。美人睡起薄梳洗。
燕舞鶯啼空斷腸。

此篇は美人の睡起背面の態を寫せり。故に起句美人の氣倦み情慵くして、睡味の濃なるをいふ。沉香亭は唐の明皇外國沉香材を貢するを以て沉香亭を作りしとぞ。

深宮の中寂寥として人なく、春の日の遅々と長きに、沉香亭の北は、百花方に香し。此時美人睡起して情慵く、體弱うして濃粧をなすに懶く、薄く梳り面を洗ふ。梁上には燕子舞ひ、階下には鶯囀りて、深宮轉た日長く、閨怨結びて解けやらず、空しく腸を斷つのみなり。沉香亭北の句は、李太白が清平調の句を引用せるなり。清平調にいふ、名花傾國兩相歡、長得君王帶笑看、解釋春風無限恨、沉香亭北

倚闌干と。

畫工欲畫無窮意、背立春風初破睡、若教回首却嫣然、陽城下蔡俱風靡。

嫣然ニハシは笑ふ貌、陽城下蔡は二縣の名にして、楚の貴介公子の封ぜらる、所、宋玉の賦に臣里之美者、莫若臣東家之子、嫣然一笑惑陽城、迷下蔡云々とあり。

畫工美人の形を圖し、閨怨無窮の意態を寫さんと欲するに、正面に畫きては必ず盡し得ざらんことを思ひ、特に意匠を用ひ、美人春風に背き立ちて、始めて睡の破れたる狀を畫きたり。蓋し背立して面を見せしめざる中に、自ら無窮の意を含めり。もし此背面美人をして首を回して嫣然と一笑せしめば、陽城下蔡の貴介公子も、悉く心を迷して、風の如くに靡くならむ。畫工の事は、西京雜記に元帝後

宮既多、不得常見、乃使畫工圖形、案圖召幸之云々と見ゆ。

杜陵飢客眼長寒、蹇驢破帽隨金鞍、隔花臨水時一見、只許腰肢背後看、心醉歸來茅屋裏、方信人間有西子。

杜陵飢客は杜子美をいふ。子美自ら謂ふ衣體を蓋はず、常に人に寄食し、奔走暇あらず、常に恐る溝壑に轉死せんをと。飢客といふべし。蹇驢は蹇は跛なり、驢は説文に似馬長耳也とありて、兎馬をいふ。杜子美韋左丞に贈る長篇の詩にいふ、騎驢三十載、旅食京華春、朝控富兒門、暮隨肥馬塵と、西子は所謂西施にして美婦人なり。吳越春秋に若邪溪傍に東施家西施家あり、西施姓は施にして西にあり。越王范蠡の計を用ゐて、之を吳王に獻ず。其後吳を滅し、蠡復た西施を取り、扁舟に乗り、五湖に遊びて返らず云々と見ゆ。杜陵に住める飢客杜子美は、常に悽々として面に溫色なく、眼中長

へにすさまじし。杜詩にいふ秋山眼冷魂未歸とあるもの是なり。かくて杜子美は跛の驢馬に乗り、破れたる帽を戴き、金鞍に跨れる權貴の後に随ひ、曲江の邊に行き、花を隔て、水に臨み、一たび美人を瞥見すれば、正しく面をば見せて、たゞ背後より腰肢の風態を見るを許したるのみ。故に其詩に背後のさまを賦して、顔色の美は説かざりき。蓋し周昉が畫ける背面の美人は、杜子美の麗人行にいへる麗人と其形相同じ、故に畫を以て子美の所見に擬するなり。杜子美背後より一たび見しすら、なほ恍惚として心酔へるが如く、茅屋に歸りし後嘆すらく、今の世にも古の所謂西子の美なきにあらずと。かく信じける子美に、背面美人の首を回して一笑するさまを見しめば、當に如何なるべきぞ。心酔の出處は、列子黃帝篇に有神巫自齊來、列子見之而心酔云々とあり。

君不見孟光舉案與眉齊 何曾背面傷春啼。

後漢書逸民傳に梁鴻字は伯鸞、扶風の人なり。業を大學に受け、既に郷里に歸りて、勢家其高節を慕ひ、多く之に女はさんと欲せしかど、鴻竝に娶らず。同縣の孟氏に女あり、狀肥え醜うして黒し。力石臼を舉げ、對を擇びて嫁せず。父母其故を問ふ、女の曰く、賢なる梁伯鸞の如きを得むと欲すと。鴻聞いて之を聘す云々。後共に霸陵山に入りしが、吳に至りて、梁鴻至て貧しく、人の爲めに賃春す。歸る毎に妻爲に食を具へ、按を舉げて、眉に齊うす。傭主察して之を異として曰く、彼の傭能く其妻をして之を敬する此の如くならしむるは、凡人にあらざるべしとて、家に舍らしめきとぞ。

梁鴻が妻孟光は、婦道を守り、其夫を敬すること賓の如く、食を進むるに案を舉げて眉と齊うす。今に至るまで賢婦人と稱せらる、

にあらずや。さるを婦道を修め得て、艶情を恣いまにし、閨怨を懐いて、背面春色を傷む、孟光の風を聞かば、愧づべきことにこそと、誠めを寓する作者の主意なるべし。

六、王介甫の明妃曲

明妃は王昭君なり。王は姓、名は嬙、昭君は其字なり。而して昭の字、晋文帝の諱に觸るゝが故に、石季倫改めて明君といひしを、其後遂に稱して明妃となせしとぞ。

漢の元帝は、後宮の佳人既に多くして、常に見るを得ざりしかば、畫工毛延壽をして其形を圖せしめ、圖を按して、召し入れ幸しぬ。宮人等、皆畫工に賂ひ、多きは十萬金、小きも五萬を減ぜず。王昭君は自ら其貌を恃み、獨り與へざりしかば、遂に見ゆるを得ざりき。

竟寧元年、匈奴單于入朝し、漢氏に婿たらんことを願ふに及び、上、圖を按し、昭君をして行かしむ。昭君入りて辭せしとき、光彩人を動し、左右を疎動す。上、信を外國に重じ、悔悟すれと及ばず。其事を窮究して實を得、毛延壽竟に弃市せられたり。李白の王昭君詩に、昭君拂玉鞍、上馬啼紅頰、今日漢宮人、明朝胡地妾とある即ち是なり。

明妃初出漢宮時、
淚濕春風鬢脚垂、
低回顧影無顏色、
尙得君王不自持、
歸來却怪丹青手、
入眼平生未曾有、
意態由來畫不成、
當時枉殺毛延壽。

明妃將に匈奴に赴かんとして漢宮を出てし時は、遠き別れの悲しくて、涕涙は春風に向つて墮ち、粉粧濕ひ、鬢脚鬆れ垂る。立ちて我身の影を顧みれば、顔貌黯然として光彩なし。淚顔愁貌、平生の美姿

なきも、尙ほ君王には一見、悦びの念制持し難く、朝を退き寢殿に入り、竊に怪む、畫手の寫せる丹青の平生我目にするもの、中、かかる美貌の存せざるは何故ぞと。されど絶世の美人は、天生の風致、自ら粉黛顔色の外に在りて、固より筆の及ぶ所に在らず。之を思はずして、延壽が賄を得ざるに由り、昭君を寫さざりしとて、當時枉げて刑殺しぬ。

一去心知更不歸、可憐著盡漢宮衣、寄聲欲問塞南事、只有年年鴻雁飛。

昭君一たび去りて、單于に嫁しなば、復た漢に歸る日あるべからず。而して最も憐むべきは、昭君の胡服に變するに忍びずして、漢宮の衣服を著け盡して、身を離さざること是なり。あはれ何の人に憑りてなりとも言傳せばや、塞南なる漢の都は、今何事かあると。され

とたゞ年々鴻雁の西に向ひて飛ぶのみにして、人の往くこと稀なれば、其詮なきぞかし。

佳人萬里傳消息、好在氍毹城莫相憶、君不見呎尺長門、閉阿嬌、人生失意無南北。

消息は音信なり。此二字は、本、易の剝の卦及び豐の卦より出づ。氍毹城は胡地、多く毛氍もて幃帳となす、故にいふ。呎尺、呎は八寸なり、一呎一尺、甚だ邇をいふ。左傳僖公九年、天威不遠顔呎尺とあり。長門は離宮の名、長安城に在り。陳皇后之に居る。阿嬌は陳皇后の小字なり。李白の妾薄命の詩に、漢帝重阿嬌、閉之黃金屋、咳唾落九天、隨風生珠玉、寵極愛還歇、妬深情却疎、長門一步地、不肯暫回車とあり。

昭君萬里外の胡地より音信を傳へていへらく、妾は健在にして胡

城にあり、幸に心を勞する勿れと。詩人は更に昭君を諭して曰く、昭君よ君はかの阿嬌を見ずや、長門宮に在りて、天顔を去る僅に呎尺なれど、幽閉せられて相見ゆることを得ざれば、一步の地も千里の遠きが如し。さればたとひ漢宮に在るも、千萬里の外に在ると異ならじ。君に得ざれば、阿嬌の長門に幽閉せらるゝも、昭君の匈奴に嫁せらるも、共に同じ不遇にして、塞南塞北の別なきぞかし。

七、王介甫の明妃曲（其二）

王昭君匈奴の單于に配し、寧胡閼氏と號せしが、漢恩を思慕して已まず。遂に琵琶を弾じて其恨を寄せ、之を名けて昭君怨といふ。爾後詩人賦詠して之を哀むとぞ。昔公主の烏孫に嫁するとき、馬上に琵琶を作り、以て其道路の思を慰めしめしとかや。明君を送りしとき

も、必ず爾かせしならむ。

明妃出嫁與胡兒。 氈車百兩皆胡姬。 含情欲語獨無處。 傳與琵琶心自知。

明妃の漢宮を出でて胡家に嫁するとき、單于は氈車百兩もて之を迎へしが、百兩に乗ずるもの、悉く胡國の姫にして、漢音を解するものとは絶えてなし。萬里風沙の難を侵して匈奴に嫁する昭君は、情鬱して語るに人なく、何處にか心事を説かむ。たゞ琵琶絃中多少の情を寫して、心自ら知るのみ。

黃金捍撥春風手。 彈看飛鴻勸胡酒。 漢宮侍女暗垂淚。 沙上行人却回首。

捍撥は唐の樂志に高麗琵琶、蛇皮もて槽となし、楸木を面となし、象牙を捍撥となすと見ゆ。揮て絃を彈ずる具を捍撥といふ。

春風の如き柔き手の、黄金の撥もて琵琶を弾じつゝ、飛鴻の南に歸るを望みては、思郷の念抑へ難かりけん、強て胡國の酒を勸むなり。昭君に従ひて胡地に來れる漢の侍女たちは、琵琶に哀怨の聲多きより、暗に涙を垂れ、沙上を行く旅人も、首を回して躊躇しぬ。

漢恩自淺胡自深、人生樂在相知心、可憐青家已蕪沒、尙有哀絃留至今。

青冢云々は單于死して子達立つ、昭君達に謂て曰く、將、漢たらんか、將、胡たらんかと。曰く胡たらんと。昭君毒を服して死す。國を舉りて之を葬る。胡中白艸多く、而して此冢の艸獨り青し。故に青冢といふ。

昭君天成の麗質もて一たびも帝に見ゆることを得ず、空しく深宮の中に歲月を送れり。是れ漢の恩は自ら淺きなり。胡に嫁してより

は、閼氏の位に昇り、單于の鍾愛を得、恩寵自ら深し。人生の歡樂は、心を相知りて能く契ふに在り。恩愛深く契ひなば、胡國とても樂しかるべし、何ぞ戀々として漢を慕はんや。憐むべし昭君は漢を忘るることなく、死して尙ほ胡の鬼とならず、冢上に青艸を生じ、漢たるを示す。其青冢已に蕪沒すれど、琵琶の哀絃尙ほ存し、傳へて今に至るまで怨恨の聲を留むなり。

八、歐陽永叔の明妃曲

羅景倫いへらく、古今昭君の詞を賦する多し。たゞ樂天の漢使却廻憑寄語、黄金何日贖娥眉、君王若問妾顔色、莫道不如宮裡時、の詩は、前輩以て衆作の上に出づとなす。蓋し君を忘れざる意あり。歐公明妃の曲は、公自らは太白に勝れりとなすも、而も其實樂天に及

ばす云々と。

漢宮有佳人。天子初未識。一朝隨漢使。遠嫁單于國。

絕色天下無。一失難再得。雖能殺畫工。於事竟何益。

畫工は毛延壽を指す。

漢宮の中に美人あり。世に絶れて佳麗なりしかど、たゞ深宮にのみ籠りしかば、帝もはじめの程は識りたまはざりき。然るに一朝漢より明妃を單于に贈る使に隨て胡地に赴き、遠く匈奴の單于が國に嫁することとはなりぬ。明妃が絶れたる容色は天下に並びなく、かかる美人の一たび失はゞ、再び得難くて、帝にはいたく怒らせ給ひ、能く畫工を殺し、かど、事に於て遂に何の益もなし。

耳目所及尙如此。萬里安能制夷狄。漢計誠已拙。

女色難自誇。

後宮の中、耳に聴き目に視る遠きにあらざるも、尙ほ絶世の佳人を識ることを得ず。あゝ人主の聰明近きにも達せず、況むや萬里の外、安ぞよく教令を施して夷狄を制御するを得む。漢は其初に當り佳人を擢用せず、空しく宮裏に幽閉し、他に與ふるに及むで、乃ち歎惜す。事既に晚し。畫工を惡みて誅するに至りては、漢の計誠に拙なりと謂ふべし。又昭君は其絶色を負ひて、畫工に媚びず、遂に身を夷狄に葬るに至るは餘憾あり。

あゝ女色の絶れたるも、遂に自ら誇りがたきかな。

明妃去時淚。洒向枝上花。狂風日暮起。飄泊落誰家。

紅顏勝人多薄命。莫怨春風當自嗟。

明妃胡に赴かむとするときの悲傷の涙は、路傍枝上の花に向つて灑ぎ墮ち、日暮れて狂風起る、之に任せて行く花は、飄泊して誰が

家にか落つるぞ。あはれ紅艶の顔色、人に勝れて美なるは、多くは薄命にして、意を失ひ易し、獨り昭君のみにはあらず。されば春風の吹き起りて飄轉するを怨むことなけれ。只當に自ら天命の幸薄くして此に至れるを嘆くべきなり。

九、歐陽永叔の明妃曲和王介甫

歐陽永叔は平生未だ嘗て其爲る所の文を矜大せざりしが、一日酒を被り、其子斐に語て曰く、吾作廬山高の詩は、今人能く爲るなし。惟李太白は之を能くせん。明妃の曲後篇は、太白爲る能はず。惟杜子美之を能くせん。前篇に至りては、則ち子美爲る能はず。惟吾之を能くすと。前篇は此篇を指し、後篇は前の漢宮有佳人の詩を指すなり。

胡人以鞍馬爲家。射獵爲俗。泉甘艸美無常處。鳥驚獸駭爭馳逐。

胡國の人は鞍馬の上を以て家となし、弓を射、獸を獵するを以て國の俗となす。匈奴傳に匈奴居于北邊、逐水草遷徙、無城郭常居畊田之業、然亦有分地、兒能騎羊引弓射鳥鼠、少長則射狐兔肉食、士力能彎弓盡爲甲騎云々とある是なり。其地泉甘くして艸肥え、肥艸を追ひ甘泉を尋ねて常處なし。常に馬を騁せ、鳥の驚きて飛び、獸の駭きて走るをば争ひて馳逐し射殺すなり。

誰將漢女嫁胡兒。風沙無情面如玉。身行不遇中國人。馬上自作思歸曲。

王嬙を遣るは元帝なり。然るを誰かといふは、恨むることの深きなり。誰か漢の美女を將てなさけなくも此胡兒に嫁し與へしぞ。匈奴

は沙漠の地にして、風暴く沙を揚ぐ。風沙情なくして玉の如き昭君の面を撲ちぬ。行き行きて長路を歴れども、曾て中國の人に遇ふことなく、備に行程の艱難を嘗め、漢宮を思ふ情、轉、切なりしかば、馬上自ら思歸曲を作りて、哀怨の情を寫にけり。

推手爲琵琶却手琵琶。胡人共聽亦咨嗟。玉顏流落死天涯。

琵琶却傳來漢家。漢宮爭按新聲譜。遺恨已深聲更苦。

琵琶はもと胡中馬上に鼓する所のもの、手を推して前むるを琵琶といひ、手を引きて却くるを琵琶といふ。其二字を取りて器の名とす。玉顏は文選神女の賦に苞溫潤之玉顏と見ゆ。

昭君思歸の曲を作り、或は琵琶し或は琵琶して自ら彈ず。胡國の人共に其聲を聽きて、亦各々咨嗟して哀を生ぜり。玉顏の美人昭君一たび流落して、胡中に入り、天涯に空しく其身を亡しぬ。かく其人已に

逝きて、今は則ち亡きも、然れども其平生彈じたりし曲は、却て傳へて漢に來れり。漢宮の人々は、琵琶の曲の傳はれるを聞き、争て新聲の樂譜を按檢して肄ひ傳ふ。新聲とは新に傳へし琵琶の曲をいふ。絃曲に寄せし遺恨已に深うして、後人譜に依て曲を奏すれば、其聲更に苦しく、遺恨の情一きはあらはるゝぞかし。

纖纖女手生洞房。學得琵琶不下堂。不識黃雲出塞路。豈知此聲能斷腸。

纖々は好手の貌、古詩に娥々紅粉粧、纖々出素手とあり。洞房は婦人の居處をいふ。文選舞の賦に燿華屋而燿洞房と見ゆ。

明妃が纖々たる美麗の質もて洞房の中に生長し、琵琶を學び得て深閨にありしかば、曾て堂より下りて戶外の事を知るなし。況むや萬里の外、黃雲横れる出塞の路を識ることあらむや。されば琵琶を

學ぶ初め、是れ後來腸を斷ちて征路を悲む聲となるを知らむや。あ
あ琵琶の聲、遂に塞上哀怨の情を寄する悲曲となりしか。

十、張文潛の七夕歌

天河の西、星あり、煌々として參星と俱に出づ、之を牽牛といひ、天
河の東、星あり、微々として氏星の下に在り、之を織女といふ。傳へ
いふ七月初七の夜、二星の神、天の河に會すと。茫々たる河漢の中、
奕々たる正白の氣ありて、光耀五色を帶ぶるもの其徵應なり。

述異記更に不經の説をなしていふ、天河の東、美麗の女人あり、即
ち天帝の子なり。機杼女工、年々勞役して雲霧綃縑の衣を織成す。
辛苦殊に歡悅なく、容貌整理するに暇あらず。天帝其獨處を憐みて、
河西牽牛の夫婦に嫁與す。爾後竟に織紵の功を廢し、歡を貪りて歸

らず。帝怒責して河東に歸し、たゞ一年に一度牽牛と相會はしむと。
古樂府にも迢々牽牛星、皎々河漢女、織織濯素手、札札弄機杼、終日
不成章、涕泣零如雨、河漢清且淺、相去復幾許、盈盈一水間、默默不
得語と見ゆ。

更に又附會の談は、荆楚歲時記を引きていふ、漢の武帝張騫をして
河源を窮めしめ、槎に乗じ月を経て去る。一處に至り、城郭を見る、官
府の如し。室内一女の織あり。又一の丈夫、牛を牽きて河に飲まし
むを見る。騫問うて曰く、是れ何の處ぞ。答へて曰く、嚴君平に問ふ
べしと。織女槎機石を取り、騫に與へて還らしむ。後、蜀に至り、平
君に問ふ。平君いふ某年月日、客星牛斗を犯す云々と。

人間一葉梧桐飄、
葦收行秋回斗杓、
神官召集役靈鵲、
直渡銀河橫作橋。

淮南子に一葉落而天下知秋とあり。蓐收は孟秋を司る神なり。斗杓は北斗七星の尾の一星をいふ。斗柄正月は寅を指し、二月は卯を指し、漸く移りて十二月丑を指す。杓の指す所、月を紀す。役靈鵲は、風俗通に織女天河を渡るに當り、鵲をして橋を爲らしむ云々と見ゆ。

人間梧桐樹の一葉落ちて飄へるとき、天上には蓐收の神、斗杓を回して七月を指し、孟秋とはなりぬ。其七月七日の夜は、天帝の命を行ふ神官、靈鵲を驅り役し、銀河の上に、横に橋を造らしむ。其は天帝の孫女を渡らしめんためなるべし。

河東美人天帝子。機杼年年勞玉指。織成雲霧紫綃衣。辛苦無歡容不理。

銀河の東に美人あり、天帝の女なるが、機杼を事として休むなく、

年々歳々玉を刻めるが如き手指を勞して、雲霧の紋なせる紫綃衣を織り成せり。綃は綺の屬なり。かくて織女辛苦して歡樂なく、容を粧ふ暇だになし。

帝憐獨居無與娛。河西嫁與牽牛夫。自從嫁後廢織紉。綠鬢雲鬟朝暮梳。貪歡不歸天帝怒。責歸却踏來時路。但令一歲一相見。七月七日橋邊渡。

天帝は織女の獨居機杼を事として、借に娛むなきを憐み給ひ、河西なる牽牛夫に嫁せしむ。嫁してより後、織女は織紉を廢し、只管冶容に心を入れ、緑の鬢に、雲の鬟、朝夕化粧を怠らざりき。雲鬟は、杜牧阿房宮の賦に綠雲擾々、梳曉鬟也とあり。かくて織女は、牽牛を悦びて、歡娛を貪り、帝の許に歸寧せざりしかば、天帝大に怒らせ給ひ、織女を召し還し、舊と來し路を蹈みて、河東に還らしめ、常

には行かしめず。たゞ一歳一度相見るを許し、七月七日の夜、橋邊に相會するなり。

別多會少知奈何。却憶從前歡愛多。匆匆萬事說不盡。

玉龍已駕隨羲和。河邊靈官催曉發。令嚴不肯輕離別。

便將淚作雨滂沱。淚痕有盡愁無歇。

羲和は、書經堯典に乃命羲和、欽若昊天、曆象日月星辰、敬授人時、云々とあり。羲和は日を掌る官なり。滂沱は大雨の貌。詩小雅にいふ月離于畢、俾滂沱云々と。

一年にたゞ一夕のみ河を渡る。別離の時は常に多くして、會合の期甚だ少れなり。牽牛織女二星の心果して如何。憶ふ昔同じく居て、少時も離れず、歡愛の情いと多かりしに、今は別れがちに、偶逢は逢ふものゝ、匆々と忙はしくて、平生鬱結の襟懷だに説き盡くすこ

との叶はぬぞ悲しき。

萬事匆々未だ説き盡さざるに、東天はや紅に、日輪湯々玉龍に駕して、羲和を隨へて出でぬ。河邊に事を司る靈官は、曉を催し告げて、織女の還るを促し、天帝の制令甚だ嚴峻なれど、猶ほ眷戀踟躕して離別を輕じ得ず。涙を墮すこと、雨の滂沱たるが如く禁じ得ず。あはれ面上の涙痕は、いつか盡くる期あらむも、別離の愁は、終に歇るときなからむ。

我言織女君莫歎。天地無窮會相見。猶勝嫦娥不嫁人。

夜夜孤眠廣寒殿

嫦娥は昔、后羿不死の薬を西王母に得、其妻嫦娥之を竊み、月に奔り、遂に身を月中の仙に托せしとぞ。李白の詩に白兔搗藥秋復春、嫦娥孤栖與誰憐と見ゆ。廣寒殿は、天寶遺事にいふ唐明皇月宮に

遊び、天府を見、榜して廣寒清虛の府といふ。素娥十餘人皓衣、白鸞に乗じ、桂樹の下に舞ふを見る云々と。素娥は月の號なり。詩人織女を慰籍していふ、織女よ別多く値ふこと少なるは、固よりあぢきなし。然れども歎息する勿れ、一歳たゞ一夕相會ふとも、天地は窮りなければ、千歳萬歳會ふ相見るべし。されば猶是れ嫦娥の月中に栖み、夜々廣寒殿に孤眠するに勝れること遠きにあらずや。王建の七夕曲に、河邊獨自看星宿、夜織天絲難接續、拋梭振躡動明璫、爲有秋期眠不足、遙愁今夜河水隔、龍駕車轅鵲填、流蘇翠帳星渚間、環佩無聲燈寂寂、兩情纏綿忽如故、復畏秋風生曉路、幸回郎意凡須、一年中別今始初、明星未出少停車と、併せ記して参考に資す。

十一、吳駿公の永和宮詞

李白の宮中行樂の詞に柳色黃金嫩、梨花白雪香、玉樓巢翡翠、金殿鎖鴛鴦、選妓隨雕輦、徵歌出洞房、宮中誰第一、飛燕在昭陽と、永和宮詞は、此宮中の事を寫し、宛轉の調を以て綺麗の語を行ひ、千古の絶唱と稱せらる。畢竟明の毅宗皇帝、田貴妃を愛し給ひし事蹟を潤飾せしものなり。貴妃は揚州の人なり、帝の寵を恃みて、漸く僭横の念を生じ、皇后周氏と相軋り、帝に譴せられ、一旦退けられしが、後再び召さる。されど久しからずして病歿しぬ。已にして李自成京を陥れ、帝は后と萬歲山に崩御せられしが、此詩は其顛末を記せるなり。

揚州明月杜陵花、夾道香塵迎麗華、舊宅江都飛燕井、
新侯關内武安家。

揚州は禹貢揚州の域にして、春秋の時は吳に屬し、後越に屬す。漢

に江都又は廣陵といひ、隋に揚州といふ。宋元明之に仍る。杜樊川の詩に明月滿揚州とあり。田貴妃の郷貫は陝西江都縣なれば、揚州の明月と語を下して、貴妃に比せしなり。杜陵花は、韓君平の詩に春衣夜宿杜陵花とあり。貴妃の美に喩ふ。爽道香塵は、魏の明帝薛夜といへる美人を宮中に迎へしとき、沈香の細末を通路に布きしとぞ。麗華は張麗華といへる陳代の美人なり。飛燕は趙飛燕をいふ。前漢の成帝嘗て微行し、出でて河陽主に過りて樂を作し、趙飛燕を見て之を悦ぶ。武安は漢代の武安侯田蚡なり。

田貴妃の美貌は揚州の明月に比すべく、杜陵の花に喩ふべし。さればいつしか九重の中にも聞え、召し出されしが、道すがら香塵を布きて貴妃を迎へるさま、魏の明帝の寵妃を召されしもかくこそと思れぬ。貴妃の舊宅は江都にして、かの飛燕と同井なり。井は里と

同じ。貴妃の父の田宏遇も爵關内侯に封せられて時めけり。田蚡の故事を引けるは同姓なればなり。

雅步纖腰初召入。 鈿合金釵定情日。 豊容盛鬢固無雙。
蹴鞠彈碁復第一。

鈿合は指櫛なり、金釵は簪なり、長恨歌に見ゆ。

纖き腰もて行く金蓮歩、いかにやさしく見えしぞ。帝には鈿合金釵賜ひて、定情のしるしとし給ひき。貴妃は豊容に、髪もふさくとしてうるはしく、天下に雙ひなき上に、蹴鞠彈碁の遊藝までも、第一と評せられたり。

上林花鳥寫生絹。 禁木鍾王點素毫。
楊柳風微春試馬。
梧桐露冷暮吹簫。

上林は、漢武帝建元三年上林苑を開く。廣袤二百里、離宮七十所、皆

千乘萬騎を容るとぞ。此處は宮中の意に用ゆ。

禁本鍾王は禁中に祕藏せる魏の鍾繇、晋の王羲之の帖をいふ。

興に乗じては御苑の花鳥を生絹に寫し、折りに觸れては白毛の筆執りて古法帖を學び、輕風楊柳を吹く春の日は、馬場に馬を試み、露梧桐を沾す秋の夜は、階下に蕭を吹くなり。

君王宵肝無歡思 宮門夜半傳封事 玉几金床少晏眠

陳娥衛艷誰頻侍

流賊李自成等起りて京を陥れ、君には宵衣肝食、御心を國事に勞せられ、絶て歡樂なく、宮門夜半封事を傳奏するなど、金床の下、安き眠にも就かせられざりしかば、陳娥衛艷など幾多の美女も御召し出さることなかりき。

貴妃明慧獨承恩 宜笑宜愁慰至尊 皓齒不呈微索問

蛾眉欲蹙又溫存

皓齒は白き齒をいふ。楚辭の大招篇に朱唇皓齒とあり。蛾眉の出處は詩の鄘風碩人章に螭首蛾眉と見ゆ。幾多の宮女顧られざるに明慧なる田貴妃一人のみは君の特恩を蒙りぬ。笑ふにも宜く、愁ふるにも宜く、君王を慰め奉ればなり。即ち笑ふにも齒を見はさずして微に君の意を索め伺ひ、愁ふるにも眉を蹙めずつくりひ直すなり。

本朝家法修清讌 房帷久絶珍奇薦 勅使惟追陽羨茶 内人數減昭陽膳

清讌は精進料理なり、内人は内膳職をいふ。

明朝の家法嚴くて、節儉を旨とし、精進料理の質素を常とせられぬ。まして、飢饉の折なればとて、節儉の上にも節儉し、久しく珍奇の薦を絶てり。たゞ時々陽羨地方の茶を求めらるゝのみ。されば内膳

職も聖意を體し、數々昭陽殿の膳部を減せしとか聞く。

維揚服製擅江南、小閣爐烟沈水含。私買瓊花新樣錦、自修水遞進黃柑。

田貴妃寵を恃みて漸く華奢に流れ、以前住みし維揚あたりの服製の心に叶へるとかにて、紗縠を江南に取り寄せ、宮殿意に適はずとて、別に小閣を構へ、爐には沈水の香を炷きて、烟に香氣を含ませ、新奇の錦を裁ちて造れる花を萬金に買ひ宮婢に與へしとか。貴妃又水遞の法を修して、驛遞水を取り寄せ茶用にし、黃柑を好むとて遠方より之を進めしむ。驕奢極れりと謂ふべし。

中宮謂得君王意、銀環不妬溫成貴。早日艱難護大家、比來歡笑同良姊。

銀環は宮中の妃妾、禮を以て君の所に御するとき、女史ありて其日

月を書し、授くるに金銀環を以てす。溫成は宋の仁宗の妃張溫成を指す。

周皇后は賢夫人にわたらせられ、謂へらく、田妃は能く君王の御心を得しかば、驕恣の行あるも姑く恕し給ひ、田妃の手には常に銀環を持たせ進御せしめぬ。されば田妃は古の張溫成の貴き待遇を受くるも皇后にはいさ、かも妬まず、加之皇后は帝の未だ大統を繼がせ給はざりし以前、多くの艱難を擁護したりき。爾來皇后周氏と田貴妃とは眞の姉妹の如かりき。

奉使龍樓賈佩蘭、往還偶失兩宮歡。雖云樊嬭能辭令、欲得昭儀喜怒難。

龍樓門は太子の宮なり、門樓の上に銅もて造れる龍あるより名けしとぞ。樊嬭能辭令は昔、前漢成帝のとき、趙飛燕合徳の姉妹一

は后となり一は昭儀となりて、互に不和を生ぜしとき、其姑樊嬭辭令に巧にして、能く之を調停したりきとぞ。

皇后と貴妃とはいと睦しかりしに、圖らずも古の賈佩蘭にも比すべき侍兒の東宮に御使を奉じて到りし際、皇后と田妃との感情を害してより遂に兩宮の不和を生じ、古の樊嬭を再現せしむるも、之を調和すること難し。

綠綈小字書成印。瓊函自署充華進。請罪長教聖主憐。含情欲得君王愠。

綠綈は綠色の厚繒なり。充華は九嬪の一にして貴妃の官名なり。田妃は大膽にも皇后を除かんものと、綠綈に細字もて書し捺印し、瓊の箱に入れ、充華進むと其上に署して進奏す。書の意は皇后と不和を生ぜしは、我が罪なれば何卒罪せられたしといひ、君王愛憐の情

を起さしめ、皇后を除かんとしたりき。

君王内顧恤傾城。故劍還存敵體恩。手詔玉人蒙詰問。自來階下拭啼痕。

傾城は漢書外戚傳に李延年歌曰、北方有佳人、絶世而獨立、一顧傾人城、再顧傾人國、とあり。もと李延年在姉の絶れて美なるをいへる詞よりすべて美人の稱となる。君王には傾城の美人田妃を恤み給はぬにはあらねど、故劍をもて艱難を掃攘せられし周皇后との恩誼も棄て難きにや、手から貴妃を詰問せられしかば、田妃は階下に來りて泣涕して罪を謝しぬ。

外家官拜金吾尉。平生游俠多輕利。縛客因催博進錢。當筵便殺彈箏伎。

金吾尉は宮闕を守衛警邏する官なり。漢光武帝嘗て曰く、仕官して

は當に執金吾となるべし云々と。

外家たるかの田宏遇は官金吾尉に拜せしが、是亦驕傲極りなく、一擲千金の豪遊に財を輕じ、賭博して勝てば、負けし客の錢を嚴しく迫り取る。特に甚しきは酒宴の席上、怒に乗じて彈箏の伎を殺害したること是なり。昔、晋の王愷、酒筵にて女伎の笛を吹き調子を失したりとて毆殺したりし故事に比べて、殘忍の程ぞ思ひやらる。班姬才調左姬賢。霍氏驕奢竇氏專。涕泣微聞椒殿詔。笑譚豪奪灞陵田。

霍氏は漢の霍光、竇氏は後漢の竇憲をいふ。何れも外戚にして驕傲を極めし人なり。班婕妤の才調、左貴嬪の賢を有せる田妃も、父の田宏遇に於て霍氏竇氏の如き專横ありしかば、主上逆鱗し給ひ、田妃を責めしかば、妃は涕泣し父翁を諫めしがと、少しも聞かばこそ、笑

談の間、長安の西なる灞陵の田をば、己が權勢に任せて、さる人より奪ひぬ。

有司奏削將軍俸。貴人零落宮車夢。永巷傳聞去玩花。景和門裏誰陪從。

有司は奏聞して田將軍の俸を奪ひしかば、田貴人も今は零落して、宮車にて朝することも昔の夢となりぬ。かくて田妃は永巷に在りて傳へ聞くに、君王には今日皇后と輦を同うし、景和門に花を御覽せらる、由なるが、御遊びには誰か陪從しつらむ。昔なりせば御側近う侍りつるものをなど、空しく心を傷むるも甲斐ぞなき。

天顏不憚侍人愁。后促黃門召共游。初勸官家伴不應。玉車早到殿西頭。

天顏憚ばれざりしかば、侍從のものもいたく心を痛め、皇后には其

と御察し給ひ、宦官をして召し入れ、共に看花の御遊をなしぬ。皇后の初め主上に此儀を勧めたりしも、わざと御應あらせられざりしが、早已に田妃の車は、殿の西頭に到り著きぬ。官家は、帝王の稱なり。兩王最小牽衣戲。長者讀書少者弟。聞道群臣譽定陶。獨將多病憐如意。

兩王は毅宗の二皇子永王慈炤、悼靈王慈煥を指せるならむ。定陶は前漢の定陶王にして慈炤に比せり。如意は前漢の趙王如意にして高祖の寵姬戚夫人の子なり。高祖崩後、呂后に鳩殺せられぬこゝは慈煥に比せり。

田妃の王子數多ある中に、慈炤慈煥の二王は、尙ほ幼くおはして衣を率きて戯れ遊び、長者の慈炤は書を讀み、少者の慈煥は友弟なり。太子を定むるに當りて、群臣は慈炤を立てんとせしを、帝には病身

なる慈煥を憐み給ひ、太子に定めんの御思召なりけり。

豈有神君語帳中。漫云王母降離宮。巫陽莫救蒼舒恨。金鎖彫殘玉筋紅。

神君語帳中は朝家いたく宦官を抑制し給ひしより、宦官等は言ふやう、斯く我等を冷遇せるより、崇りて皇子御降誕あるも、皆早世し給ふなりと、神君即ち御先祖が帳中にあらはれ物語られぬ云々と。王母降離宮は王母は西王母なれど、こゝは明の神宗の母李太后を指す。太后佛を崇め、宮中に佛像を九蓮座に作り、九蓮菩薩といへり。帝曾て慈煥の病を見舞れしとき、慈煥忽ち曰く、九蓮菩薩には帝の外戚を薄待するを怒からせられ、盡く諸子を天せしむと。遂に薨せられぬ云々。巫陽はミコをいふ山海經の註に神醫也とあり。蒼舒は魏の鄧哀王冲傳の字なり、年十三にして殤す。太子の天死に比せり。

豈神君の帳中に語りし事あらむや、決して無きなり。王母離宮に降りて皇子を殤せしむなどの事亦決して信ぜられず。されど太子の天死は事實なり。あはれ巫陽は太子の恨を救ひ、病を治し、長壽ならしむる能はざりしか。帝統を繼ぐべき金鎖の如き皇子凋殘し、宮中をして玉涙を流さしむるのみ。

從此君王慘不樂。叢臺置酒風蕭索。已報河南失數州。況經少子傷零落。

叢臺は邯鄲縣にあり。河南失數州は明末李自成、張獻忠等亂を起し、河南の地數州を陥れしを指す。

掌中の玉を失ひしより、君王には慘として樂まれません。せめてもの氣晴しにと、叢臺に酒宴を開くも、いかで憂をば慰めむ。蕭索と吹き來る風は一しほ哀憐の情を催すのみ。已にして河南の地は流賊の爲

めに陥れられ、福王常洵は殺害せられしとの蜚報に接し、帝の御心の中や如何なりけむ、察しても餘あることなり。

貴妃瘦損坐匡牀。慵髻啼眉掩洞房。荳蔻湯溫水簟冷。荔苳漿熱玉魚涼。

荳蔻は名草なり。性溫にして冷氣を散ずる效能ありとか。

さなきだに弱き貴妃の、皇子逝きてしより、いよ／＼瘦せ衰へ、朝夕匡牀に座せしが、匡牀は達磨椅子の如きものなり、髻を結び化粧するにも懶く、泣き暮して洞房に鎖し籠れるのみ。簟の冷かなる氷の如くなれば、荳蔻の溫湯にて腰脚を溫め、荔苳を好みて逆上しければ、魚形の水晶を口にし熱を散ぜし等、只管養生に心を用ゐたり。

病不禁秋淚沾臆。裴回自絕君王膝。苔沒長門有夢歸。花飛寒食應相憶。

盡せる療養も其甲斐なく、病はいよ／＼革み、秋冷と共に危篤に及び、悲しみの涙は胸を焦せり。裴回として自ら君王の膝に倚り絶命しぬ。裴回はぶら／＼の意なり。あはれ苔むして貴妃が宮の長門を没するも、夢ならでは貴妃は再び歸られず、花飛ぶ寒食の頃、烟は断えて墓木新なり。君王追懷の情おもひやるだに哀れなり。

玉匣珠襦啓便房、
薤歌無異葬同昌、
君王欲製哀蟬賦、
誄筆詞臣有謝莊。

玉匣珠襦、玉匣は玉もて装ひし手匣、珠襦は珠の飾ある短衣、昔、漢帝の死を送る皆珠襦玉匣を以てしたりしとぞ。便房は宮中休息所の類、薤歌は薤露挽歌なり。昔、田横自殺せしとき、從者敢て哭せず、而も哀に勝へずして、悲歌を爲りて情を寄す。後、之を廣めて薤露蒿里の歌を作りて終を送りしが、李延年に至り分ちて二曲となし、薤

露は王公貴人を送り、蒿里は庶士を送る。柩を挽く者之を歌ふ、因て呼で挽歌といふ。同昌は同昌公主なり。唐の懿宗の同昌公主を葬らるゝ其と異なるなし。哀蟬賦は漢帝李夫人の爲に、落葉哀蟬の曲を賦し、女伶をして歌はしめしとぞ。謝莊は晋末の人、仕へて光祿大夫に至る、文帝之を異とし劉湛に謂て曰く、藍田玉を生ず、豈虚しからんや云々と。

田妃の葬式は玉匣珠襦もて棺中に歛め、便房を啓き、行列して出でられしが、挽詞は同昌公主の葬儀に於ける其と異なるなく、君王自ら哀蟬の賦を製して、貴妃を傷悼せんとし給ひ、誄詞を作りし詞臣には、古の謝莊にも劣らぬ人ありき。

頭白宮娥暗嘸燈、
庸知朝露非爲福、
宮草明年戰血腥、
當時莫向西陵哭。

西陵は貴妃の葬所なり。此段は一箇の老宮女を假設し其口中より興亡を説く。

白頭の老宮女、顔を蹙めていへらく、貴妃のあの世の人となりしは悲みの極みなれど、又考ふれば露の命の消え失せしこそ却て幸福ならめ。何となれば明年は流賊の爲め都も戦血腥く、萬乗の君も果敢なき最終を遂げさせらる。されば貴妃の死は喜びこそすれ、西陵の墓地に向ひて哭泣すれ勿れ。

窮泉相見痛倉黄、還向官家問永王。幸免玉環逢喪亂、不須銅雀怨興亡。

玉環は楊貴妃を指す、銅雀は臺名にして魏の曹操愛妾を貯ふ所なり。杜牧の詩にいふ、折戟沉沙鐵半消、自將磨洗認前朝、東風不與周郎便、銅雀春深鎖二喬と。

花の都も戦雲に覆はれ、毅宗帝も周后も萬歲山に果敢なき最後を遂げさせられしを、昌平の人田妃の墓を啓き帝后を葬りたりとぞ。故に窮泉即ち地下にて相見ゆと言ひなせり。田妃は地下にて君に相見え、世の倉黄を痛み、又吾子の永王の事を問へるならむ。幸に田妃は唐の楊貴妃の安祿山の亂に逢ひて、馬嵬の露と消えし如きを免れたれば、銅雀臺に上りて、興亡を怨むることを用ゐざるべし。

自古豪華如轉轂、武安若在憂家族。愛子雖添北渚愁、外家已葬驪山足。

物盛なれば必ず衰ふ。豪華の後に憂患至るは、恰も車轂の轉するが如し。されば古の武安侯にも比すべき田宏遇が此世に在ませば、必ず李自成の爲めに一家族滅の慘を見るべきものを、早已に身まかりぬれば此憂を見ざりき。されば田妃は愛子の行衛の知れずして、

北渚を望みて斷腸の愁あるにもせよ、父上田宏遇の驪山に厚葬せられしを思へば満足なるべし。

夜雨椒房陰火青。杜鵑啼血濯龍門。漢家伏后知同恨。止少當年一貴人。

杜鵑啼血云々は蜀の先蠶叢始めて王と稱し、其後杜宇帝と稱し、望帝と號せしが、位を其相に禪り、因て自ら亡け去り、化して子鵑となる。故に蜀人子鵑の鳴を聞きて曰く、是れ我望帝なりと。羅鄴の詩にいふ、蜀魄千年尙怨誰、聲聲啼血滿花枝、滿山明月東風夜、正是愁人不寐時と、濯龍門は興慶宮の北に、椒房は未央宮に在り、共に皇后の居なり。漢家伏后は、後漢の孝獻帝の皇后にして伏完の女なり。曹操、華歆をして宮に入り、伏后を幽殺せしめたり。以て周后に比す。雨蕭々として降る夜、椒房は陰火青く、濯龍門は杜鵑の聲哀し。周后

の流賊に迫られ自裁せしは、漢家の伏后と其恨を同うすべく、たゞ少く所は、董貴人の如きものなきことなり。董貴人は董承の女にして曹操承を殺し、とき共に殺されぬ。田貴妃もし此世に在せば、董貴人の如かりしを、早世してつゆ知らざりしこそ今はなかく幸なれ。

碧殿淒涼新木拱。行人尙識昭儀塚。麥飯冬青問茂陵。斜陽蔓草埋殘壠。

茂陵は漢武紀に徙郡國豪傑于茂陵とありて、帝王の墓所の意に用ゆ。田妃の玉を瘞めし處、淒涼として墓木已に拱に、行人尙ほ田妃の塚なることを識れり。田妃の塚は、毅宗も周后も共に葬られしなれば、いはゞ帝王の陵なり。されば麥飯冬青の供へ物もて之を弔ひしに、蔓草掃はずして、殘壠を没し、夕陽空しく荒陵を照すのみ。人をし

て坐ろに涕涙を催さしむ。

昭丘松楨北風哀、南内春深擁夜來、莫奏霓裳天寶曲、景陽宮井落秋槐。

夜來は美人の名なり。霓裳天寶曲は唐玄宗の製し給ひし樂曲なり。天寶四年に楊貴妃を召し給ひし時、此曲を奏せしとぞ。西清詩話に術士葉法善明皇を引きて月宮に入り樂聲を聞きて歸りしが、但、其半を記す。會々西京府の楊敬達婆羅門の曲を進む、聲調脗合す。之を按して韻に便にし、やがて二者を合せて霓裳羽衣の曲を製す云々。景陽宮は陳の後主の宮殿なるが、後主隋兵に迫られ、張麗華、孔貴嬪と共に殿前の井中に身を投じぬ。あはれ昭丘陵の松楨は北風に咽びて哀しきに、何事ぞ南都の興慶宮に在りては、福王常洵の子由松一時を苟偷し、日夜聲色に耽り、美

人夜來を擁し、春深く酒宴を事とする。今は危急存亡の秋なり、晏然として天寶霓裳の曲を奏する勿れ、景陽宮前の井中には、既に秋槐堆し、殷鑒遠からず、南都も誠むべきことならずやと誠しめぬ。印刷の都合にて暫く筆をこゝに擱く、他日機を見て、勇壯の詩を釋き、別種の天籟を聞かんかな。

古詩新釋

をばり

明治四十一年九月十日印刷
明治四十一年九月二十日發行

古詩新釋與付

定價金參拾錢

著者 岩垂憲德

發行者 宮邊富次郎

東京市神田區猿樂町二番地

印刷者 中野鏝太郎

東京市京橋區南小田原町二丁目九番地

印刷所 東洋印刷株式會社

東京市芝區愛宕町三丁目二番地



發兌 大賣捌所

東京市神田區猿樂町二番地
振替貯金口座八五七〇番
東京堂 東早稻田同文館支店
神田東京堂 東早稻田同文館支店
大坂寶文館 梅田盛文館
備後町寶文館
韓國日韓書房
京城日韓書房
名古屋川瀨書店
久留米菊竹書店

正則英語學校講師
佐川春水先生譯註

銀行盜賊

郵定價裝
税金全
金五
拾一
錢錢冊

正則英語學校講師
佐川春水先生譯註

湖上の怪物

郵定價裝
税金全
金參
拾五
錢錢冊

英學界主筆
吉田幾次郎先生譯註

西洋今昔物語

郵定價裝
税金全
金貳
拾一
錢錢冊

內村達三郎先生譯註

トミソル 失樂園
始祖夫婦
純愛の卷

郵定價裝
税金全
金四
拾一
錢錢冊

中央大學講師
前田定之助先生譯註

ドコナシ 金庫の毒蛇

郵定價裝
税金全
金參
拾一
錢錢冊

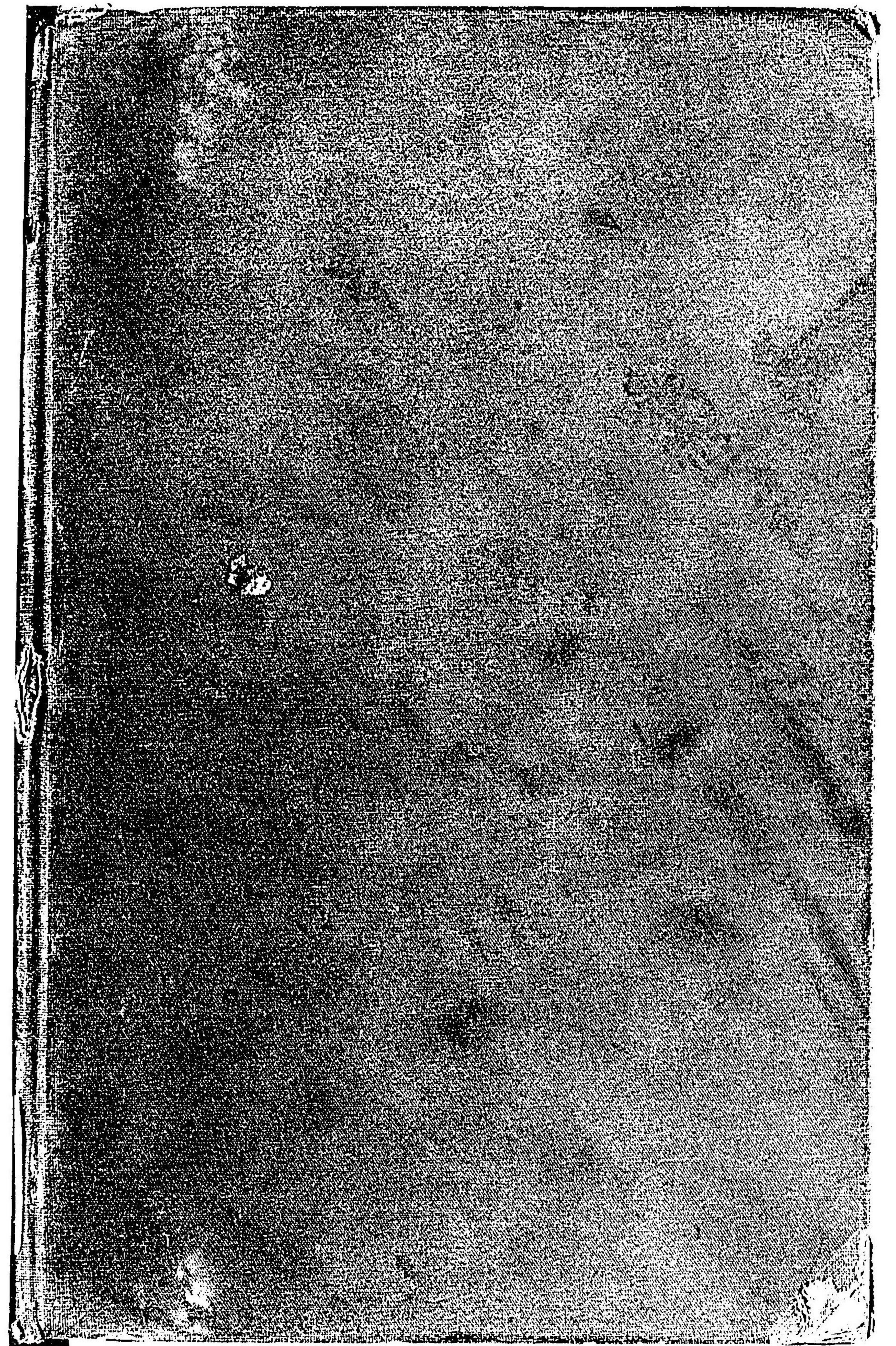
正則英語學校講師
長谷川康先生譯註

英和トモエ集

郵定價裝
税金全
金四
拾一
錢錢冊

18

893



18

893

098360-000-8

18-893

古詩新釈

岩垂 憲徳 / 著

M41

DBV-0050



18

893

